

\* 0053355000 \*

0053355-000

587-353

秋風帖

柳田国男・著

梓書房

昭和7

AIA



587  
353



124





柳田國男著

秋風帖

梓書房版





587-353

序

これは私の最も自由なる旅行の一つであつた。前にも好んで路程を變へて  
見ることはあつたが、此時ばかりは始から計畫といふものが無かつた。駿州  
の焼津で汽車を降りてから、成るべく鐵道と筋かひにあるいて見ようとして  
大井と天龍との間を幾日かうろついた。磐田引佐の堺の尾根づたひに、昔の  
秋葉路を逆に八名郡へ抜ける氣になつたのは、濱松で色々の話を聞いた後で  
あつた。こゝでは熊村までの二日路を、中村修二君が同行してくれられた。  
三河の新城では今和次郎君が跡から遣つて來て私を捜しあてた。さうして  
共々に作手の山村に、入つて見ることになつたのである。作手の秋色と故事



人物とは、殊に奄留に適するやうに思はれたが、我々は遊歴人の氣持にはなり切れなかつた。忙はしく郡塚川の水の流に追隨して、下山しもやまの客舎に一夜を明かし、その次の日は既に松平の故邑を見物し、九久平岩津くまひらを通つて、黄昏に岡崎の御城下へ出てしまつた。此間の記事は本文が之を詳かにして居る。菅江眞澄の足跡は消えて居たけれども、彼を生み育てた故郷の土の香には、又改めて大いなる親しみを持つことが出来たのであつた。

幡豆はづの海沿ひは二十年餘り前に、船から見て通つた懐かしの村里であつた。こゝに一日の逍遙を試みる爲に、私だけは後に残り、今君は又別の旅に立つてしまふ。次の日は岡田撫琴氏の自動車に送られて、岡崎を辭し矢矧の上流を渡り、舉母こまもの町に來て草鞋を買ひ、靴を再び荷持のカバンに結はへ附けた。但し此邊の人足は自轉車に乗つて、さつさと先へ飛ばして案内などはして

れない。半分途も行かぬうちにもう向ふから戻つて來て、たしかに置いて參りましたなど、澄まして居る。西加茂の山村は家毎に瀬戸の陶器用の石粉を搗き、岡を片端から切崩しては鄰國へ賣つて居る。明るい眞白な、しかし落莫たる光景であつた。猿投さなびの靈山の麓の里のみが、獨り此間に於て幽邃であつた。私は土地の考古家小栗鐵次郎氏を頼んで、巴の紋を描いた左鎌の、堆かく積まれて居る御社を參拜し、それから夜に入つて飯野といふ村の、古風な旅籠屋に辿りついた。

翌朝は美濃の柿野の郷へ、僅かばかりの一つの峠を越えた。地圖には名を掲げてないが昔からの大切な道路と思はれた。尾張と三つもあひになつた三國山の東の腰で、その三國山こそは年に一度、地方に漂泊するサンカ族の寄り集まつて、宴樂し又妻問ひをする會場として著名であつた。柿野には柿の



園すでに衰へ、鳥網張るわざばかり愈々盛んである。山の北面は見渡す限り、竹で圍うた鳥屋が高い處まで立て連なり、日の中は人の往來が繁かつたのみならず、「秋山のスケッチ」に見るやうな兩縣の交渉が、此間に行はれて居るのであつた。

しかも此谷の口になつた山の尾崎を一つ曲がると、再び石の粉の白く漲ぎる里續きであつた。部落をシマといふ古い言葉は残つて居るが、それを繋いで居るのは竝木も無い新式の繩手路であつた。石を工場へ運ぶ荷馬車が、ひどい土埃を浴びて絶間も無く下つて行く。その一臺に私の荷物は托して、暮近く多治見の町に入つて見たが、こゝでは何としても獨り宿するに堪へなかつた。それから更に自動車を備うて、兼山の少し上手で木曾川の橋を渡り、燈の光靜かなる太田の町まで遣つて來た。こゝには紙上の舊知林魁一君が住

んで居る。家はこの古驛の制約に依つて、高い防火壁を取附けたる巨大なる萱葺きであつた。夜深く提灯をともして後園の柿をもぎ採り、その種類の有るだけを盆に盛つて、携へて旅店に來て遅くまで話をしてくれた。其夜の話柄は今でも大半は記憶に存して居る。

次の日は其柿と合乗りして、岐阜に出て久しぶりに汽車の客となつた。大垣の町に下りて見ると、こゝには共進會があつて數限りも無い柿の實が出陳せられて居る。山々の美しい秋の日の光が、流れてこの公園の一隅に淀んで居るやうな感があつた。それから車を馳せて楫斐川右岸の新らしい川除堤を、海津郡に入つて今須高田の町を歴訪して見たが、河川工事の爲めに交通系統は全く改まり、持つてあるいた地圖は用に立たず、以前津島の天王様の試樂の日に、遠く太鼓の音を出て聽いたといふ村なども、もうどの邊である



やらわからなくなつて居る。天野信景が浪合記を見つけ出した時代に比べると、尾張は西美濃からずつと引離されてしまつたやうな氣がした。

その晩は桑名の船津屋に泊つて、曾て此欄干に依つて千鳥を聴いた頃のことを想像して見た。水陸の變化は伊勢灣頭に於て、殊に送迎にいとま無きものがあつた。人間の遺物はほゞ舊形のまゝであるが、歴史は既に遠干潟の如く、遙かに目路のあなたに引退いて居る。此岸ばかりから物を觀てはならぬと思つた。それで船の路の次々に改まつて來たことを考へて、急に紀州の加太浦を見る氣になり、出来るならばそこから淡路へ渡つて行かうと思つた。

翌日の汽車では、伊賀と大和とは素通りにして、直ちに紀ノ川の右岸まで出て見たが、五條以西は私には生路であつた。粉河の觀音の御寺には、古い同志の逸木盛照師が居られる。今では宗務に携はつて不在勝ちの様にも聞い

たが、結縁の爲に汽車を下りて參拜した。果して上人は留守であり、境内も至つて森閑として居て、そこらを見巡るうちに自分へ話しかける者は、たゞ古い讀書の僅かな記憶だけであつた。懐かしいと思つたのは後代の兒文珠ちこもんじゆ、さては武藏の深大寺などに、移し傳へられて居た神童文學が、茲では千年も前から既に花やかに展開して居たことである。龍宮も寂光淨土も皆それであつたが、我々は終始民族固有の幻しを透して、この渡來の教法を渴仰して居たのであつた。本堂の片隅にいさゝかな手細工物を額に上げて、「おらくをさめたてまつる」と拙ない文字で書いてあるのも、何か大きな現象のやうに私には感じられた。こゝの繪馬堂には長州の講社の名が多く、それが大抵は船方であるらしいのも、思ひ掛けぬ發見であつて、それから今日まで心にかけては居るが、まだ其由緒をつきとめることが出来ない。



加太は私が想像して居た以上に、十二分に既に漁村化して居た。久しく磯の香の間に立ち盡して居たけれども、遠國の言葉などは一つだつて耳に入つて來ない。濱は土地の人ばかりの、むつまじい休養場であつて、淡路へ渡る船ももうこゝからは出ない。淡島様の御社では、紅い小さな紙の人形を、婦人の御守りとして出して居るだけで、今でも數多く田舎を巡つて居る修験者の、本山らしい様子などは少しも無かつた。夏はやつぱり海水の御客だけを喚ぶやうに、宿屋の支度も改まり、風景も亦それに似つかはしくなつて居る。或は要塞あたりの干渉であつたかも知れぬが、兎に角に湊は案外に早く忘れられるものだと思つた。

そんなら今度は瀬戸内海の方はどうなつて居るか。序に見て置かうといふ氣になつて、次の日は大阪に出て來て、夕方の下りに乗つた。是だけは昔の

旅行には望めないことである。汽車を一夜の宿にして次の朝はもう廣島に降りて居た。それから宇品へ行つて東へ行く乗合船を物色すると、ちようど何箇處かの島の村に寄りつゝ、御手洗みたらひまで行くといふ船がある。大崎下島は今の名を大長村と謂ひ、舊友の五領田君が村長をして居る。島の蜜柑作りも歴史は至つて古いが、それよりもこゝは桃の名所として知られて居た。更にもう一つの世に名高い理由は、勿論地形であり風を頼りの航運法ではあつたが、土地にもそれと調和するだけの機關が、中古以來備はつて居て、それで此湊を若い冒険者たちに、忘れ難いものにして居たのであつた。だから船の構造が變り帆が改良せられて、水路は昔の通りで無くなつても、景氣のよい間は來て繋がる船が多かつたのであるが、そんな心元ない力だけでは、永く外側との交通を保つことは難い。湊が受身の繁榮によつてその觸角を失ひ、孤



立の危険を感じる例は他の地續きの土地にもあらうが、島では脱却の必要が一段と急である爲に、誰にでも早く氣が付くのである。

手舟の利用の衰へてしまつたことは、一度はすべての島と岬の村里を、非常に淋しいものにしたやうである。海は大道であるけれども常設の航路の外に立つと、朝夕互ひに見かはして居ながら、少しも消息を知らずにたゞ竝んで居る鳥の多いことは、平野を旅する者の推想の外であつた。私は大崎下島の技師某君に伴なはれて、一旦尾道へ戻つて生口の島へ渡り、瀬戸田から峰を越えて南の磯づたひに、原とかいふ部落に来て小舟を見つけ、對岸の伊豫の岩城島に送つてもらつた。それから案内も無しに此島の山路を經廻つて、更に生名に渡り又因島に渡つて、漸く乗合船を得て汽車のある陸地へ歸つて來た。尾道の淨土寺山に登つて見ると、海が七つの湖水のやうに見えるとい

ふ程、此あたりの島山は重なつて居るのだが、縣が異なる限りは中心も別々であつて、其間の交通が思ふやうで無いのみか、同じ一つの地塊に據りながらも、端と端とは丸で心持のちがつた島人の、住んで居る場合さへ稀で無いらしい。全體に農を重んじ漁を輕んずる人たちが、移つて拓いた村里が多いやうに思はれた。今では事情も大いに變つたらうが、まだあの頃までは瀬戸田の町のやうに、船を持つて弘く世間を試みて來ようといふ氣風は、此邊ではさう普通で無かつた。單なる成行きが土地の幸福を支配して居る點は、山奥の村などと異なる所が無かつたのである。

しかも一方は外部の刺戟が單純であるだけに、どこでも大よそ似たやうな道筋をとつて、變化して行かうとして居るに反して、島の境遇は一つ一つが違つて居た。斯うして一望の裡に羅列して居る生活にも、何れを代表として



他を類推してもよいといふ箇所が無い。細かく分けて見るならば瀬戸内海の島々は或は數百の小さな社會であるかも知れない。是はどうしても志を起し、もう一度計畫を立て、見てあるかなければならぬと、深く心に念じて其時は歸つて來たのであつた。それが知らぬ間に早くも十何年の歳月を隔て、今は僅かに物の序を以て残んの思出を辿るばかりになつたのは、誰よりも先づ自分に對して濟まぬ話であつた。旅は一生のうちに見たいと思ふ處を、見盡してしまへばそれでよいといふのは、單なる逸民の我慾に他ならぬ。是を身の學びとし又世の知識とする爲には、今日は殊に短い期間に、努力して廣く遠く經廻する必要がある。土地の事情が刻々に移り變つて、今と前年とを比較することが難いからである。自分は壯年以來幸ひに多くの機會に恵まれて居たけれども、尙一念の貫徹を缺いて居たが故に、結局一端を知つて他の半面

を推斷するやうな、最も覺束無い近代の流俗を、脱出することが出来なかつたのである。

紀行は全體誰が讀むものかといふことも、今更ながら問題とせざるを得ぬ。實地を知らない人たちへの案内の書であるならば、此本などは餘りにも説明が拙であり、又餘りにも筆が省いてある。或は膝栗毛のやうに知つて居る人の爲に、共同の興味を抱かしめるものとしては、私の通る路はいつも稍片隅に偏して居た。當時自分ではまだ心付かなかつたけれども、やはり僅かばかりの同じ道を行かうとする人の他に、主としてはその土地の住民の、目に觸れることを期して居たらしいのである。前代の旅日記の類には、斯ういふ讀者を豫想したものは稀であつたらうが、しかも今日となつては此人たち以上に、深い關心を以て之を讀む者は他に無い。紀行の目的とする所は時世と



共に變らなければならなかつた。私などの觀察は精確で無かつたかも知れぬが、兎に角にこの新らしい需要に應じたもので、それが事實を見誤つて居らぬ限り、いつかはその土地の人に認められて、或は記録無き郷土の一つの記録として遺るかも知れぬ。

卒直なる外部の批判は、實際は甚だ耳に入り難いものである。是が新聞によつて即刻に頒布せられ、容易にその誤謬を訂正し得るといふことは、今少し利用してもよい新時代の便益であつた。たゞ私は此方面に不馴れである爲に、いつでも文章の効果を危ぶむやうな念があつた。殊に旅先で物を書くといふことが不安であつて、長く續けて行けなかつたのは残念である。大正九年は私一箇の爲に、最も記念すべき旅行の年であつた。前後三篇の紀行を草して東京朝日新聞に載せて居る。その第三の海南小記は、早く一冊の本とし

て世に公にし、最初の東北紀行も之に次いで「雪國の春」の中に載せてある。獨り其中間の「秋風帖」のみが、いつ迄も切抜のままで保存せられてあつたのを、今度思ひ立つて書物の形にしたが、よく見ると其分量が少し短か過ぎた。それ故に二三同種の文を其後に附加へ、別に此一篇の追憶記を序文の代りに卷頭に掲げることにした。此頃久しく旅をして見ぬので、脚も筆も共にやゝ痿えて居る。



目次

序文

秋風帖……………一

御祭の香……………三

山から海へ……………二

武器か護符か……………五

出来合の文明……………九

目次



目次

野の灯山の雲……………二三

御恩制度……………三〇

狼去狸來……………三三

巢山越え……………三六

屋根の話……………四二

ポンの行方……………四六

馬の仕合吉……………五〇

杉平と松平……………五四

還らざりし人……………六二

ブシュマンまで……………七〇

茂れ松山……………七四

秋の山のスケッチ……………八一

向小多良……………八九

木曾より五箇山へ……………九九

佐渡一巡記……………一〇七

佐渡の海府……………一六一

熊野路の現状……………一八五

峠に關する二三の考察……………一九九

目次



秋  
風  
帖

地圖目次

1. 秋風帖	六頁
2. 木曾より五箇山へ	二〇
3. 佐渡一巡記	二五
題簽	折口信夫





島田の町の祭禮では、面白いのは人が雉や山鳥など、同く、男ばかり極彩色の衣裳で花やかに賑わてあるき、女は渴仰の目を揚げて之を見守つて居る。

異性の間には嫉の争ひと云ふものが、全く無いかと思ふ程である。或はじみな木綿縞の袖口を突出した、賤の女とも謂ふべき婦人が、路傍にイんで頻と何か言つて居るから、そつと近づいて聽いて見ると、それは前を通る踊の唄に合唱して居るのであつた。此様な單純な耳の人が住んで居る土地である。



平和ならざるを得ないでは無いか。

御大禮の時でもさうであつたが、あまり熱中して支度をする爲に、當日が待ち兼ねるものと見えて、宵宮の前の晩からもう十二分の豊の明りをして、肝心の神輿渡りの日には既に些しく樂み疲れに疲れて居る。紅紫の羽二重の襦袢が、汗ばんで塵を招いて居る。大名行列の小さな武士は、馬の上で眠りかけ、又はだゞをこねて附添ひの親たちを困らせて居る。揃への扇のあどけない踊子が、折々懐から柿などを取出し、白粉の口の端を汚しながら、跟いて行くのも是非が無いと思はれた。

それに又歡樂も今日ばかりと云ふ淋しさも萌して居る。次の四年目には世の中も變るであらう。ましてや遠國から來合せた者などには、無邊際に只一度の遭遇だ。何でもよく見て置かうと思つて、群衆と一團になつて動いて行

くと、是が目まぐるしいと謂ふものであらうか、世界が只虹のやうに茫漠と美しいだけで、音聲にも茲を視よと誘ふほどの、強い中心と云ふものが無かつた。獨り不思議なことには平生最も謙遜で且稍幽鬱なる鼻ばかりが、無暗に働いて色々の事を考へさせてくれる。實に意外なる體驗であつた。

吾々平民は固より生れながらの詩人では無い。大まかな同情者が高尚と評してくれさうな今日のやうな感想でも、仔細に分析して見ればやはり物質的の基礎の上に立つて居る。此町に入込む程の者が、均しく感受する快よい恍惚は、則ちこの常と異なる「人いきれ」の致す所である。言はゞ吾々の鼻に訴へる土埃の音楽である。香の一種である。氣を附けて見ると、なつかしい昔風のメロデイが、その新しい調子の中に籠められて居る。

古人の頬にも觸れたに相異無い舊の五月の日影である。其が一旦人々の胸



を通つて来て、此市街を暖めんとして居る。最も生活に親しみの深い色々の物の香が、之に由つて運ばれるのである。中でも植物なら花に該當する部分が甲<sup>かん</sup>が高い。所謂殿方用白粉も今日は盛に消費せられて居る。現代文明の力が喚覺した地下の石炭の精が、香料と爲つて其中に現れて出る。次には髪の毛であるが、是も昔の若者等が久しく味ふを得なかつた尊さに迄達して居る。おきさ次郎兵衛の淨瑠璃にも「あくれば匂ふ梅花の薫り、闇にもしるき云々」とあつて、心中する程の大阪の女で無ければ、附けることも出来なかつたものを世の中が進めば、此邊では殆んど一人残らずに使用して、且歡樂の熱を以て之を溶して居る。其香が何の爲に我々の祭禮の基調を作るのかは、民を愛する神々ならば勿論知り切つてござるであらう。足穂<sup>たほ</sup>の田に溢れる如く、人草は里に茂らねばならぬからである。

之に反して百年前の秋祭に、嚙曉たる響を發して居たもので、今や漸く幽かなのは甕を迸り出る新酒の香であつた。赤い樽を離れ白い徳利に近づく時勢に爲つてから、酒はみだらな者が弄び、眞摯な者の怖れ又は税を掛ける品と變化した。確かに斯邦の神の道では無い。二階で獨り飲むやうな惡風習は改めて、今一度之を御祭の日の合奏に、加へて見たいものである。かう云ふ淋しいことも考へさせられた。

下

煙草を酒と對立させるのも洋風であるが、島田の祭では驚くほど此煙の香が高く、嗅ぎ過すことが出来なかつた。我々に脱帽を命じた神輿の世話方も脚へて居た。踊屋臺の上も下も、女に入交つた若者は殊にバット敷島を愛



して居た。僧侶に抹香が伴ふやうな、一種の流行と思はれたが、其が祭の空気を作るに至つては感心しなかつた。自分は先頃奥州野邊地のさき踊で、數名の青年の巻煙草を憎いと思つた。田名部の寺でもあまり盆踊りの御へ煙草が甚だしいので、終に境内で踊ることを斷られたと云ふ話を聞いた。祭や踊を農村の娛樂など、名ける人々が、恐らくは斯様な變な流行に就いて、責任の大半を分たねばならぬのであらう。

白粉鬢附のロマンチックに對立して、最も古典的なのはやはり食物の香であつた。何人も熟知した種々の昔の、如何にも微妙なる配合である。なつかしい音色である。其は獨り人間の故郷たる、豊かなる土から發生した爲ばかりでは無い。遠き祖先が餓ゑ疲れる度毎に、必ず思ひ出した林や磯の幸福を、語るが爲と云ふだけでも無い。町の生活に最初から必要であつた統一と調和

が、今では祭禮などの日で無ければ、容易に我々の心を動かす迄に現れて來ぬからである、硝子戸の文明は臺所の隔絶を意味するが、大昔に在つては一團の部落は、即ち一箇の庖厨であつた。民の竈の喜びは時として高き屋にも達した。甲の家で松茸を煮る夕は、直に又乙丙丁の爐側でも、之を味はふ時であつたのに、次第に力の及ばぬ者が多くなり、殆ど一塊の森や竹藪で包まれた里にして、やれ何作では鱒を焼くよと、美まれ評判せらるゝに至つて、乃ち板戸衝立の沙汰が始まつたのである。祭は何と言つても復古の事業に相異無い。此日ばかりは鮓でも甘酒でも粟の餅でも、人の製する品を我も作るから遠慮が無い。其爲の門戸開放でもあるまいが、戸は引揚げ暖簾ははづし、掃き淨めた土間を透して、紅く勝手元の火が燃え、物の香は子供よりも自由自在に隣近所を出入りする。通り掛つた遠國の者が、深い旅愁を感じるのも、



正しく此刻限である。

御互に笑はれるのを恐れて何も言はぬが、子供の時の食慾ほど、郷里を慕はしめるものは實は無いのだ。さうだ此句ひもよく記憶して居る。河の神の夏祭の夜などに、廣い草原に一輪の大きな花の如く、塵と人影とが提灯の火に照されて居る部分がある。胸を躍らせて其中に紛れ込むと、煮詰つて行く煮込のおでん、踏潰された果實や瓜、其他色々の香が群衆に暖められて流れて居た。強ひて求めたら地方と時代との特色もあらうが、鹽と五穀の主たる種は一つで、冬の境に一度は遊べと云ふ、神意を共に受けた我々である以上は、此音楽も亦國歌の一である。此次の四年目にも上品に演奏してもらひたい。舞臺に立つ藝人のやうで無く、親や女房子と共に楽しんだ昔の日本人のやうに。(駿州島田にて)

## 山から海へ

三十年前に測圖をした陸軍の五萬分一は、焼津やいづの見物には殆ど役に立たなかつた。當時一筋半の濱の町は、後の田を埋めて四筋の餘に爲り、まだ隣村の地に食出はみだして居る。舊焼津の面影も判らぬ程、在來の人家も變つて居る。濱へ出て見れば防波堤は勿論、海が運んだ只の石までも新しい。濱の松にも老木は少い。あの尙古派のラフカチオ・ハーンが、どうして此浦を愛し續けたかを訝るばかりである。

ハーン氏も既に歴史に爲つたが、龜井知事も故人に爲りやうが早かつた。元氣な龜井さんも焼津だけで發動機の漁船が、もう百五十艘にも爲ると聞い



たら驚くだらう。勿論元は荒海の危険を凌ぐ爲の發案であつたらうが、安全帯が擴張すれば又その外へ乗出し、さうして常に危険を冒して居る。剩るから人命を粗末にするので無い證據は、焼津でも絶えず人を招いて居る。眼に見えぬ促進そまほくが此世には有るのである。

宮城岩手の海岸の村々では、焼津の鯉節商だと謂ふ青年によく逢つた。賣りに來たかと思ふとさうでは無く、此邊から半製品を買集めて、焼津で仕上げをして出すのであつた。何でも相應な産出のある土地と聞いて居るのに、更に九州からも奥からも、生節をうんと仕込んで行くとは、よく／＼人の手の剩つて困る爲だらうと、想像して來て見ると事實は寧ろ其反對で、剩つて居るのはやはり資本と所謂企業熱とだけだつた。

鈴木町長の話に依ると、最初是他郡の漁村から、多くの若者が發動機船の

練習に來たのを、舛に取つたり嫁を遣つたり、其他色々の人情の羈きづなで繋ぎ留めて、成るべく此湊の船に働かせるやうにしたが、後には相手にも注文が出來て稽古濟み次第に多くは還つてしまふさうである。それで近頃は力めて山村の青年を招くやうにして居る。成程是ならば還つてもしやうが無いから留まるであらう。船頭が多くて船を山へと云ふ諺があるが、人の方はさう自由にもなるまい。折角思ひ切つて出て來た若い衆を、再び寒い山奥へ稗を食べに、戻さぬやうにしたいものだ。

山が平穩なる隠れ里であつた時代は、實は我々に取つてはあまりに長かつた。最初船で渡つて來た此國民が、流に逆うて高地に入込んだのは、自然の趨勢と云ふことは出來ぬ。前には即ち戰亂の威嚇が有り、近世は又人口増加の壓迫が有つた。羚羊かもしかの躍るやうな山腹に麥を播く程にせぬと、この狭い島



に六千萬の生靈を盛ることが出来なかつたのである。海が廣漠の未開地であることを心付けば、彼等の下りて来るのは所謂水の低きに就くやうなもので是程成功し易い獎勵は無いのである。其代りに人間の流れにもちやんと水筋を附けて、安全な出口を指示して貰はぬと困る。此責任は誰か負うて居る人が有るだらうか。(駿州焼津にて)

### 武器か護符か

新進氣鋭の濱松の市でも、稀にはちと古臭い社會事業を遣るらしいことを、少なくとも新聞は報じて居る。何でもつひ此頃の話である。口に離れた職工たちを國に還す爲、町の有力者が旅費の金を、慈善家から集めて居ると云ふ噂である。旅費も無いやうな貧乏な家族に、還つて來たぞやれ樂やと云ふやうな、結構な故郷が有らうとは一寸信ぜられぬ。送還は果して彼等の救濟であるや否や。或はそんな事をして只問題を片付けて置くのでは無いか。

東京でも路に倒れた行旅病人を前に置いて、虞芮の争ひをした警察署が有つたさうだ。無暗な謙遜は當に事務の延滞であるのみならず、時としては餘



分の混亂を近隣に強ひることに爲る。今に全國で一齊に此政策を採用する時の事を考へると、實にぞつとしてみまふ。

一時の成功から申せば、濱松などで右の旅費の施しをするほど、簡便有効なる救濟事業は他に類が有るまい。何となれば遠方から遣つて來た勞働者は、此附近の工場にはまだ幾らも無いからである。従つて其だけ近所迷惑も大きく無いかも知れぬ。併し同時に他郡他縣から、さうして戻された者の始末を考へて置く必要が有るから、問題は決して簡單では無いのである。其上に之と關聯して、元から町に住み又は近在から出入りする職工とても、單に歸宅を見届けて安堵する譯には行かぬ。何しろ區域が廣く無いから、是だけは多益と辨すとも言はれぬやうである。

職業紹介所はまだ一向閑ださうである。てんから口が無いのだから、其は意

外でも何でも無い。頼みに來ぬから困らぬのだらうと、斷定し難い事由が何分にも多い。馬鹿げたやうな話だが、首になつたことを近所に隠す爲に、用も無いのに辨當を持つて、毎日出あるいて居る男もあつたさうだ。多くの家庭では稍其に近い忍耐をして居るに相異無い。どうにも成らぬのは成らぬとして、旅費一件だけはあまり氣樂だと思ふ。

自殺自決が責任を解除するやうな國柄ではあるが、今度の悲況などは重役の更迭、乃至は會社の解散を以て一切の終りとする様な小問題でない。勿論行政官を鞭撻さへすれば、何とかしてくれる筈と思ふのは誤りなる如く、若干の有力者が手も足も出ぬからとて、之を責めるのは不當である。平生立派な口を利いて居ながらと言ふなら、寧ろ平生利かせて置いた方が悪いのだ。單に此地方に對して説くので無いが、世の有力者たる者は深く我が無力を覺



り、捨て置き難い偉大な問題が捨て置かれた今度の悲しい経験を忘れないで、  
権能は有つても智慮の無い者には縋り附かず、此次は解決し得さうな者を働  
かせる工夫をすることだ。愚直で昔風な職工が得られて、好い按配だと思ふ  
如き鼻元思案は、未來の工業市としては第一に撤回せねばなるまい。(遠州濱松)

### 出来合の文明

同宿の一人が、宿帳に興味を持つて頻りに翻すのを側から見ると、不  
思議なことが見付かった。繭買材木商雜貨の注文取等の、遠方の旅客の中に  
まじつて、附近の村々の、職業は農と記した人が大分来て泊つて居る。郡會  
議員や役場員なら、公用で無くても所謂肩書を書く習ひだから、疑ひも無く  
是は其以外である。此邊でも景氣の好い時節には、自轉車などで町へ泊りに  
來る人が、やはり多いらしいのである。

武藏野の奥にも此の類の町は多い。大抵は月に六度の市が立つて居る。餘  
り平穩なる山中に住む者が、時に浮世を見に出て來る場所である。實際山々



の口元に、若し二俣の如き町が無かつたら、新時代は永く此人々の爲に、蓬萊の夢であつたかも知れぬ。幸ひにして祖父以前に、植ゑて置いた美しい杉檜が有つて、之を伐つて筏を組むならば、足弱ながら平地の商人が、此あたり迄は買ひに来る。彼等が門の戸は徐ろに叩かれるのである。曾ては谷川の水ばかりが、流れ下るものであつた山の奥から、一籠の果實一駄の炭までが町あるが爲に爰に集まることに爲つたのだ。

其對價として彼等の求むる物は、固より新しい幸福であつた筈だが、たゞ其幸福の目安が、毎に簡単に失してゐた。例へば山に居て暖を愛する故に、母や子の爲に綿を買ひ木綿を欲するはよいが、酒の酔をも暖かいから結構なもの熱心に求める傾きがあつた。市いちと酒とは殆ど斷つべからざる關係がある。さうで無くても亭主の方が外出の序が多いのに、斯う云ふ獨善主義の商

品が市に在つて、折々は陶然として歌つて還るが爲に、用を作つて出て行かれるやうでは、普通の貞淑では辛抱がしにくい女もあらう。

自分が試みに見てあるいた町の様子では、婦人が立止つて覗きたがるやうな店は甚だ少かつた。又小兒の爲に發するかと思ふ音響や色彩も乏しかつた。強ひて我慢をすれば附合へると云ふだけで、要するに山の町は父老の爲に出て居る。永く斯うでは居られまいと感ぜられた。

淋しい山の在所は實は元からの在所では無い。田屋たやと名けて一種の勞働場であつたのを、往復の面倒と亂世の不安と、後には里にも人が溢れた爲に、老幼を携へて當分移り住んだゞけで、日本人は邑むらに集まつて住むのが本性である。折角の天下太平に際會して、假にもう田屋を引揚げて來ることは難いにしても、せめては家内一同で同じ程度に邑居の幸福を分つやうに心掛けぬ



ならば、即ち是れ武陵桃源の牢屋である。全體に山村は人が好いばかりで、今迄は少し注文が無さ過ぎた。殆ど宛がひ扶持のやうな世間の餘り物を打込まれて、是が文明かと味はつて居た嫌ひが有る。町を利用する態度一つでは、今よりも數倍上品で、且寢心地のよい家も出來ように。(遠州二俣)

野の灯、山の雲

上

天龍の渡場で、小豆色に塗つた豆自動車にすれちがつた。村の商人の賣物であるが、賣れないので困つて居るさうだ。選挙の時にはすつと上流の熊くんままで大きなやつが來た。荷馬車に出逢つては路が狭くて換れぬので、夜來て夜戻つたといふ話である。其れでも縣道が開けた御蔭に、こんな化物が奥在所にも現れる。人馬の脊だけでは澤山の文明は持込まれなかつたのである。併し村の人たちは頓と之を歓迎するやうにも見えぬ。何年にもなるが少々の飲食店などの外には、新道の路傍に家を遷した者も無く、依然として一軒



づつ各異つたる平面に住んで居る。稀に石垣が長く続き、二戸以上脊競べをして居るのは舊道である。舊道の方が三分の一も近いから、徒歩の人は之を通るが、其代りには膝に手を添へるやうな坂ばかり登らねばならぬ。嶺には必ず僅な平地があり、人家が有る。越えて向へ下ることを、此邊では「ひつくりかへる」と謂ふ。脊戸から直にひつくり返るやうな處にも、寒いであらうに古さうな農家が住んで居る。自分を案内してくれた二年生の兒童は、何れもそんな家の子であつた。

足跡で踏開いた路だけに、如何にも自然に附いて居る。水分れに立つて見ると、何れか一方の谷は必ず見通すやうになつて居る。其展望を幾らか遮るやうな突出は、多くは昔の微細なる戰場、乃至は砦物見の跡らしい。今は引替へて電信の柱などが此に立つて居る。渡り鳥が野に下るにも、便宜の多さ

うな路筋である。

學校の子供は随分遠くから通ふが、尙どうしても分教場を置かねばならぬ部落が二つある。阿寺と云ふ區は名を聞いても寒さうだが、之と反對の西の端には、懷山の一字が山を負うて遙に散布して居る。往つては見ぬが其中の數戸は、家の後をひつくりかへれば直に引佐郡の澁川へ下つて行き、表口はまともに曳馬の野を見下すやうな處に立つて居る、いつの昔から斯うして住んで居るか知らぬが、山は元の儘でも野にはえらい進歩があつた。「にはふはり原」と歌に詠まれた叢を分けて、芋掘り長者が著積ばかり掘つて居た時代には、夜は固より眞暗な曠野であつたらうのに、一つ二つと燈火の數が増すと共に、畠あり村ある明るい田舎になり始めた。人は死ぬから一時を古今と思つたかも知らぬが、最近の變化に至つてはまのあたりである。濱松の松は



既に残り少なで、其代りに出来たのは織物の工場である。一機に一燈の電燈がついて居る。それが鐵道を越えて北は笠井の附近、更に二俣の對岸近くまで、只の農家でも二棟三棟の、長い織場を建てた屋敷が稀では無い。北を向けて明り探りに、屋根の片側を硝子にして居る。何とも無い山の上の農家に於て、静かな夕方に見て居ると、一時にぱつと美しい光が、廣い平野を彩るのを見るやうに、もう世の中がなつたのである。

## 下

西武藏の或山村からは、我東京の町の火も、亦此の如く眺められて居る。しかも只茫洋たる光の海であつて、晝の間は緑の海に代り、更に目に見えぬ人の海の、幻しを誘ふに止まつて居る。之を取繞らす武藏野原は、即ち其海

の淋しい渚である。常は一様の樹立塵煙だが、夜に入ると處々の村が露はれる。真正面に進んで来る汽車のランプの、暫くは動くとも見えないのを、今立川の橋にかゝるなど、見馴れた村の人だけは手に取るやう地理を知つて居る。流れや古木の目標に由つて、恐らくは一々の灯火の主を指點することが出来るのであらう。況んや子を遣つて置く母などの眼には、屢々其光が横に長く、霞みまた、き又は濡れて映つて居るに違ひ無い、雲に鎖された夕方でも、一つだけは其方角に見えたかも知れぬ。

濱松で補習學校を始めて居る中村君の工場にも、阿多古の山から幾人かの少年が下りて来て居る。もう其郷里では多分の次三男を、分家させるだけの耕地が無いからである。此學校が終つてから、還るか止まるか又は他に行くかは、家の者にも我々にも、等しく大きな問題である。當人等は却て一番吞



氣かも知れぬが、親たちとても思案に暮れたと云ふ風でも無い。序があると寄宿舍を訪ねて来て、泊つて行くこともあるさうである。常に促迫と云ふ味を知らぬ人々だ。次の日には工場に坐つて半日以上、機械の動くのを見て居る者も多いと謂ふ。彼岸の前後などには、鴨江の観音さまに御詣りに来た姉や叔母が、子供の顔を見に一寸寄ることもある。家へ戻つての物語は多からうが、男ばかりのごたくとした中なので、多くは何の話もせずに行くさうである。碌に修繕もせぬやうだが軌道はやはり軽便なもので、山と町とを半分の距離にした。さうして燈の光も通ふのである。只市中では電燈の数が繁くなつて、とても村里のやうに一人々々の消息を傳へるわけには行かぬ。廣漠たる人の海に向つて、扁舟は將に其纜を解かんとして居るのである。

中村君は又、よく霽れた午後などに、みんなを引連れて二階の北の窓を開

き、君等の村の山が見えるかと、聞いて見たりすることがある。山には裏と表とで、峯の形の丸きり違つて居るものが多いが、其でも感覺は至つて精巧な磁石である。或は又間違つた方角に向つて、心中の郷里を描く者もあるだらう。白い小さな雲が動いて居たりすると、直に以前の似た天氣の日を思ひ出すか、あゝ斯んな日にもやを刈りに行きたいなど、言つた子供もあるさうだ。併しもやを刈るのもさう軽い労働で無い。こんな日に山に登つて獨りで刈つて居たら、又里が見え汽車が見え、海から風が吹いて、夕方には戸に凭れて下の灯を眺めるやうなアルネのやうな氣持になつたかも知れぬ。

(遠州上阿多古)



## 御恩制度

小さな母校の庭で、今はちようど消防の演習がある。部長は二十七八のいい男だ。志願兵の少尉で、もあるかと思ふと、なに只の旦那衆ださうな。今の時節に人を手足の如く動かすのは、決して容易な技術では無い。又此邊の人士が来るべき利益を計算して、従順を装ふ程鋭く無いことも明かだ。おまけに消防は殆ど全部が義勇軍である。之を率ゐるのは所謂徳望に相違無い。さうして平和な村の徳望は世襲であるやうだ。

自分の知る限りでは、今朝出て来た遠州の熊村くまむらの如きは、先づ一流の平和地である。百五十内外の戸数が、中央のたひらに住んで居るが、其中の百二

十何戸は元からの村人で無い。而も近年の景氣で引寄せられたので無い證據には、移住者には二代目もあれば三代目もある。即ち時勢と共に、遁げて來たりまごついて居た者の、事情も亦一樣で無かつたので、其を此村ではいつの世にも親切に世話したのだ。最初は多分どこの仁が、どうして爰へ來たかの好奇心が口を開いたのだらうが、まあ働いて見よが久しからずして、どうやら正直さうなと云ふことに爲り、信任せられる方では居心地が好く、打明け話をして無理な縁を纏めてもらひ、又は其御面倒を掛ける迄も無く、既に近所の娘と内談をすませたりする。子でも出來ればもう尻が据つたものと看做される。あの畠の半分を屋敷にせよとか、乃至は此山に杉を植ゑさせると云ふことになつて、其金は大抵十年間一割の利子拂ひで、すんだことにして貰つて居る。山一つ彼方の「報徳」では別に一年分の禮金が添ふさうだが、此



邊ではそんな勘定をする人なら、いつ返すとも知れぬ者に、鍋釜を貸すやうな世話は始めからせず、又そんな冷淡な態度で、旦那おほやさま大家様と呼ばれて居る人は一人も無いさうである。世話を受けた者が言ふのだから、是は本當であらうと思ふ。

此連中は吉凶の折は勿論、年に一度の刈入れ麥こなしにも、顔を出すのを義理として居るが、之に對しては食物なり衣類なり、相應以上に氣を附けて遣るのが、大家の夫人の常の習で、結局は村の門閥の品格地位は、高い入費を以て平素から維持せられて居るのである。金はいくらでも出すと謂ふ新長者の威張方とは種がちがつて、是には歴史上の根柢がある。

只悪い事で無いだけに、世の中が變るとなると始末に骨が折れる。早い話が普通選舉が始まつても、斯ういふ村では結果は丸で元の通りである。五名か

七名の顔役の、在來の力さへ把へて置けば、依然として情實候補者を當選させることが出来る。我々の感銘の美德が公認せられて居る間は、例の温情主義も嘲笑することが出来ない。賄賂を嚴罰に處する程の官憲ですら、あの人の意見には假令非が有つても反對し得ない義理が有るなど、麥刈の手傳にでも行く氣になつて居る國柄だから。



狼去狸來

舞木峠は近年まで立派な杉林であつた。空も見えぬほど茂つた山路であつたが、而も今日のやうに淋しいことは無かつた。秋の末に村々から出て道を修復すると、其から後は雨もあまり降らず、草も生えぬ故に通行は樂で、舊正月などは秋葉道者の話聲の絶間が無い位であつた。頂上には熊くまから夫婦者が毎日來て茶店を出し、渡世をする世中であつた。其が袋井から輕便が森町に通じて、殆ど此路は不用になつた。參州から嫁に來た人が年を取つて、人力で實家へ行きたいと言つたが、三人曳でも四人曳でももう通れなかつた。さうなると晝間でも一人では氣持がよくない。時々女が追掛けられた話

もあつたが、其すら最早言はぬやうになつた。なに淋しいと謂つた所が、出る物はきまつて居る。山の犬は斯う木を伐つては此邊には居らぬ。狸などは高の知れたものだ。山の犬は姿を隠すからをつかないが、狸は提灯の前へちよろ／＼とあるくこともあつて、悪戯と言つても化の皮がすぐ露れる。でも馴ないと馬鹿にされる。一人で通ると後から呼ぶことがある。振向いて誰も居らぬと急に怖くなるが、尻聲が切れてほいほいと短いのは狐だから、立止つたり返事をしたりせぬがよい。

全體に狸は他の獸よりも、色々な聲をまねるのが巧なやうだ。狸の神樂などは此邊の人で、二度や二度は聞かぬ者が無い位だ。殊によく聞く草つ原が、此峠の路にも有る。つひ四五間の鼻先で、笛なら太鼓なら本物と寸分ちがはず、がや／＼と笑ひながら囃す様子まで、目を潰つぶつて居れば彼の所爲とは思





はれぬ。又彼とは知りつゝも、感心せず居られない。此などは全く騙すのでも悪戯でも無く、自分が面白くて遣るのでなければ、恐らく我々をして敬服せしめんが爲だらう。狐の嫁入よりも今一段と社交的である。

悪戯も或は人なつかしのすさびかも知れぬ。熊村で自分の新たに獲た人の細君などは、つい半月ほども前に、四人の同志と共に後の山に登り、盛に薪をしばつて居ると、急に役場の脇の半鐘がけたましく鳴り出した。五人が五人共に正に其音を聞いたのである。是は大變と色々としてそこらの高見から、里の方角を見ても煙らしいものも見えぬ。事に由ると狸かも知れないとよく心を落付けて兎に角に戻つて來ると、在所は極端に平穩な午後二時の茶漬時であつた。何で此様につまらぬ悪さをしたかは別問題として、狐が半鐘の眞似も上手なことだけは争はれぬ。

秋葉の奥の山が山の御犬の領國であることは、自分も之を認める。しかも此神も既に威武のみを以て君臨して居るのでは無い。天然の神の力にも限りがある。然るに人間の物を信ぜんとする力には限りが無い。此次には何が舞木の杉山を支配するであらうか。



巢山越え

遠江と三河とを繋ぐ此峠を、秋葉路と謂ふかはた鳳來寺路と呼んで居るかは、來て見るまで自分に推測が出来なかつた。が兎も角も二州の二大尊の間に、通路を求めるとすれば即ち是で、而も夙に信仰以前から存在したらしい山路である。曾ては鳳來山參詣の爲に用ゐられた時代も有つたのであらうが、近頃では正しく秋葉路であつた。今日は最早それでも無い。

鳶巢こびのすと云ふ邊が一ばん高く、大きな四五本の赤松の間から、引佐郡の山が殆ど皆見える。鎮玉しんたまの一村は眼の下である。鳶のやうな平凡な鳥でも、いつも險岨の巖壁の上に巢をくふから、目標とも爲り地名とも爲る。鳥の及ばざ

る點である。其から僅かばかり山の脊を行くと、縣境であるらしいが榜示の杭は無い。谷を隔て、三河八名郡の淺川部落がある。山田の忙しい時だのにさつぱりと庭を掃いて、一戸も貧乏らしい家は無い。三里以内に醫者は居らぬさうだが、水と日當りとは極上らしい、すつと下ると字六本松の民家は道の傍で、水車などが廻つて居る。村を出ると紅葉の山に囲まれて、美しい小沼が有り、其端に板橋が架つて居る、冬は往來の人がなくさみに、氷滑りをして行つたものだと言ふ。

沼が隠れてから僅の間は野路で、も一つ曲れば巢山の村である。廣々とよく稔つた田が有る爲に、平地に出たやうな感じがするが、四十八曲りの險を降るに及んで、始めて二階の上であつたことを覺るのだ。三州には巢山と云ふ山村が幾つかある。鷹を捕りに來る人たちが心づいて拓いたか、捕らせる



爲に特に村を設けたか。又何人が之を命名したか。今と爲つては何も分らない。今の道は兎に角毎年の秋葉参りが附けたと謂つてよい。斯んな山村でも宿屋が二軒あつた。突當りの吉田屋は材木でも片商賣にするらしく、家は農作に適するやうに出来て居る。旅客のみを待受けても居られぬ筈である。今一軒は朝鮮へ引越して往つた。立派な石垣の屋敷に桑が栽ゑてある。一晩に三百人も泊りが有つて、家の者は土間に夏の涼臺を持込み、其上に寝ることとも珍らしくは無かつたが、もう夢のやうだと土地の人が言つて居る。

四十八曲りは巢山の方からは殆ど平路である。荷馬車を通すと言つて、之をSの字を押潰したやうな七曲り位に改修して、元の通路は處々毀れたが、それでも婆様までが新道は通らず、前の前の百何十曲りかを眞直に、姥が瀧と爲つて下つて行く。下つてしまへば細川の村だ。飽きるやうな長い在所だ

と謂つたが長いだけが事實で、山を後に流れを前にし、昔風の屋敷がよく發達して居るのが、とり／＼に面白い。岡を越えると大野の町である。崖が高く下を行く三輪川の水は見えぬ。長篠の古城址は此深い谷川を隔て、居る。さうして爰にもまた一つの鳶巢山がある。



## 屋根の話

一九の膝栗毛を輪講する會が出来、其が感謝せられる時代に爲つた。廣重の五十三次などももう史料である。此寫實の繪が繪空事かと思はれる程、東海道は別な物に爲つて了つた。獨り鐵道と煉瓦とペイントとが之を致したのでは無い。眼を遙に平穩なる場面に放つて見ても、昔ながらの紅い夕日、蒼い残月の光を隈どる輪廓が、最早四分の一だけでも舊日本では無くなつた。人の頭から丁髷が引退した如く、家の屋根からは栗檜の粉板こぎいたが影を斂めた。菅笠や頬冠りが安い帽子に改まつたやうに、田舎と聞けば目に浮んだ草屋が、僅な間に悉く瓦葺に爲りきらうとして居る。其には又十分な理由が有つて、

惜いと思へばどうにか残り得るわけのものでは無いやうだ。世には何が何でも變化せねばならぬものが、此通り有るのである。

濱名湖以東には元は板葺が多かつた。或時代には之を以て驛路の美觀と考へ、都から移した文明の一つに算へたこともあつたらしいが、民家が密集して愈々火事が怖くなれば、繪巻物以來のなつかしい板屋でも、罷めて瓦にせねばならなかつた。隣國の三州は有名な瓦の産地である。制度の禁止さへ解けたら、其のみでも之に向ふべき自然の勢であつた上に、右申すやうな火の用心と、木材の騰貴とが手傳つて、終に柁大工は衰へ瓦師が大いに興ることになつたのである。徒らに昔の趣味にさへ捕はれずば、見た所は此方がずつと好い。きちんとした瓦葺に電燈でも引いて、小工業の機の音でもすれば、農村の進歩も是迄といふ感じがする。唯人があんまり幸福に成つて居らぬの



に、當惑をするばかりである。

曾ては農民の無細工な茅葺も、一旦は立派な藝術に迄進んで居た。併し残念ながらも永くは續くまい。寺や社の一生懸命の普請にすら、萱を集める爲にどれ程の苦勞をするか。只の民家で言ふならば、二十年一度の屋根替の用に、空しく十九年の萱野を立て、置くことは不可能だ。是に於てか「ゆひ」の組織が有つて、二十戸の家が順次に一戸づゝ葺替へた。其共同の野も畠に拓き木を栽ゑ、瓦に爲つた家から追々に「ゆひ」を脱する。一人の物好が靜かな雨の音を聴かうとすると、殆ど有る限の無理をして、草と職工とを遠方から喚ばねばならぬ。やがて冬の稼の山國の屋根屋も、廻つて來ぬことにならうと思ふ。

稻藁麥稈は三年も持たぬが、其でも手近の材料だから之を交へて使つて居

る。而も此とても手間融通の慣行の存する間で、飲食の入費が高くなると、やはり贅澤な工事になる。作手の山村の如きは萱を立て、置く原野は尙多いが、新たに作る家で之を利用せんとする者は殆ど無い。よい時に見に來たつくづく我々は思つた。爰ばかりが別天地で居ることの出來ない世の中にもう爲つた。赤い瓦を焼く工場が、此村だけでも三つある。五年の後には村が濶くなつて居るだらう。



## ポンの行方

海拔千五百尺の高寒な此村にも、ポンの往來する大道は幾筋か通つて居ると見える。どの山あひを越えるのか、途で遭つたと云ふ人も聞かぬが、今まで一年として來なかつた年も無く、いつの間にかちやんと來て小屋を掛け、つゝましく煙を揚げて居る。部落から稍離れた山の蔭の、樹林を隔て、水の靜かに流れる岸などが、此徒の好んで住む地點である。或は往還から下手の日當りに、子供まじりの人聲を聞くことがある。普通の里人なら必ず顔を出して此方を見るが、足音を止めると話聲を絶ち、物色しようとするれば愈々ひつそと爲るのはボンである。

馴れたら斯うも爲るものか。村の人は年々來る彼等を、軒の燕ほども注意して居らぬ。同じのが來るものか否かを尋ねても、確な返答は得られない。男は朝から川に入つて居て顔を丸きり見せぬ。捕つた物を賣りに來るのは大抵子持の女だが、どうも一つ顔だつたやうに思ふとある。此程度の交通だから、ボンも安氣に住めるのである。竹籠の類も作つて持つて出るが、主たる渡世は川漁で、中にも龜類はよく捕る。我々には想像も付かぬ小流れから、ちやんと龜の穴を見出して、居ればきつと捉へる。ボン又はボンスケの名も多分は鼈から出た我々の命名であらう。ヲゲと謂ふのも川魚漁具の名が元らしい。警察官はサンカ、又箕直みなしなども呼んで居るのである。

引揚げ前にはこそくを働くから、警察では注意すると謂ふが、恐らくは盜難の無い限りは注意せられて居らぬのであらう。來れば一世帶づゝで、群



を爲すと云ふ迄では昔から無かつたが、近年數の減じたのも事實だらう。其は田舎の渡世が段々六かしくなり、之に反して大都會には紛れて住み易いからである。ボンから見れば離散背叛、我々から言へば半分の歸化が、多くなりさうな道理である。遣つて來る季節もある筈だが、それ程よく視察した人も無い。寒くなれば濱手へ下る都合から言ふと、此邊には秋の末の今頃來て居ることと思ふ。我々が斯んなことを話して居るのを、何處かで聞いて居るのかも知れぬ。又寒中に五十錢遣つたら、乳まで水に入つて鯉を捕つてくれた。序に料理もしてくれたが下手だつたと云ふ話も聞いた。然らば冬も此邊には居ることが有るのである。

不思議なことには國勢調査の折に、氣を附けて見たがどの部落にも、ボンは一世帯も居なかつたと謂つた人が有る。自分は之を怪しまなかつたが興味

は感じた。日本の幽冥道の思想と同じく、ボンは此國土の第二の住民である。大團體とは共通せぬ利害を持つ者である。計算の外である。物靜かな京都人が全部踊つたやうな祭の日にも、私は若王子山の松林に、細い煙を擧げて居る者の有るのを見た。即ち齊明天皇紀にある朝倉山の鬼であつて、少しばかりはどうも仕方が無い。我々は久しい間之を大目に見て來たのである。事によると彼等の中の小賢しい奴は、道の辻々の赤い立派な掲示を見て、仲間者に斯う謂つたかも知れぬ。注意せよ十月一日を、此調査に洩れなかつたらボンの耻ですと。(三州作手村)



### 馬の仕合吉

此邊の人は見塚も無くすべて馬頭觀音様と謂つて居るが、馬の神の石像にも實に色々の種類がある。十一面の省略かと思ふ三面の佛さまにも、庚申さまに相違無いのにも、大日如來にも地藏菩薩にも、共通に頭の真中に把子の實によく似た馬の首が附いて居る。岡崎の石屋に馬頭觀音をと註文すると、時に由つて様々のを届けて來るのださうである。其がやはり流行でも有るものか、近頃造營の石のまだ白い分は、概して眼のくりくりとした口の脇の下つた、意地の悪さうな青面金剛である。現に今君が寫眞に撮つた、二尺あまりの石の厨子に安置した馬頭もそれで、直立した髪のを黒く彩色して、丸

で加藤清正の甲の如く、其前立の處に例の耳の尖つた馬の首がある。大正八年正月とあつた。ちつとも觀音様ぢや無いねと言つても、さうでしょうかと謂つた程の佛教の知識である。

それで又何故に、斯んな澤山の石體かと謂ふと、人は何處迄も無意味な事はせぬものだ。馬ほどの大きな物が、今まで何とも無くて卒然として斃れて死ぬ。驚き又怖れざるを得なかつたのである。乃ち其不安を安めんが爲に、成るべく古くして有難さうな手續きを履んで置くと、後日暮方などに獨で其處を通つても、胸騒ぎがするやうな患ひは無い。此も菩提の縁なりと僧たちは謂ふか知らぬが、全くは此面倒も身勝手な人間の爲で、動物虐待防止會の側から言へば、遺る恨の古戰場に他ならぬ。其ほど又數多い馬が、今尙路の畔で勞苦の尖に命を終つて居るのである。



西津輕の旅の馬追から聞いた。馬は大事に飼へば二十五歳までは生き、生きて居る間は役に立ち牝馬なら仔を産む。併し仔を持てば弱るから成るだけ種を附けぬ。殊に年老いてから牝馬を産むと、十が十迄母は死ぬさうである。駒を賣放すと三日四日は親馬が悲しむ。空しき厩に戻つて嘶く聲が痛ましい。併し一週間も過ぎると忘れるらしい。之に反して食物を與へられた家は、どうしてかよく記憶して居る。だから元の厩舎の近くに來ると、ひどく懐しが  
るものだと謂つて居た。

斯んな生活をして馬はどしどしと死んで行く。死んではならぬと云ふ點だけは、僅に人間と共通した利害であるが、さて生かして置いてどうすると謂ふか。やはり二十五歳の天壽を全うする迄は、手綱轡で驅使するばかりである。之を思ふと大津の東町仕合吉しあはせよしと染た腹掛も當にならぬ。其仕合は結局飼

主の仕合で、馬の幸福は馬自身が考へ出すまで、まだ此世の中には存在はせず、馬の神と謂つても實は人間の神で、馬が祭らぬ限りは御利益は馬の上には降らぬのだ。さうしてそんな事を些しも知らぬから、馬は黙々として人に附いて、馬頭様の前を通つて居る。さもく我運命を承認するかの如く、一步毎に合點々々をしながらあるいて居る。(三州下山にて)



### 杉平と松平

雁峯山がんほうざんの平板な横面を、掻きつくやうにして登り越えると、あちらの麓にはスギダヒラと謂ふ一里がある。作手つくての三十六部落中では、是でも一番に海に近いのだ。併し豊川の下流を汽車でばかり渡る者には、幾度通つて見てもあんな屏風の如き山嶺の北陰に、更に別箇の小天地があらうとは考へられぬ。作手の谷の水は三筋ともに、巴山の周囲を廻流して、何れも意外の方向から平野に下つて居る爲に、杉平のあたりが却つて山奥の感じを與へるのである。御前石峠ごぜんいしの頂上まで出て見れば、伊勢灣も濱名湖も一目に眺められ、豊橋附近の繁華は手に取るやうであるが、幾ら弘々として居ても他處は他處だ。

杉平の人はやはり杉平の、平和な谷合に戻つて寝た。それが少なくとも五百年來のことである。

今でも盛んに杉山を仕立て、居る。手木(テギ)と名けて四尋ばかりの繩の両端に、一尺五六寸の棒を結び、それを高い枝にからみ附けながら、十間もある杉の木に登り、冬から春にかけて杉の皮を剥くのである。民家も多くは此皮を以て屋根を葺く。少し古くなつたものは寂しい色合だ。

又古風な胴短かの牛を澤山に飼つて居て、牛の放牧の爲に處々に草山がある。牛が自然に踏み開けた小徑は、人間のつけた路によく似て居るが、氣をつけて見ると處々切れて居る。それが山腹を細かくきつて居て、遠く之を望めば若い松球のやうである。

全體に可なり開けた在所ではあるが、山一つ彼方に比べてあまりに變化が



ひどい故に、「作手三十六地獄」など、昔からわる口を言はれたものださうな。之に對して土地の人たちが、「今も亡者が二人通つた」と謂つたのは、中世の所謂秀句の類であらう。手洗所と書いてチャライと呼んだ部落などは、住民がたつた三戸である。曾て鄰のユンギ(弓木)といふ村の者が通ると、一人の親爺が路傍の岩に腰掛けて、首をかしげてちつとして居る。何をして居るか尋ねると、「うん今日は村寄合ひだ」と答へたと云ふ話もある。

杉平から小さな一阪を越えると、南赤羽根といふ村に出る。家数が十四戸、之に鄰する北赤羽根は五六戸である。高寒の二字を以て形容すべき僻地であつて、僅かな日當りの傾斜地に畠を耕して住んで居る。元龜天正の交に、奥平殿の家來に尾藤源内、黒屋久助二人の者、各之を知行すと傳へ、今も村には其苗字がある。二人は勇士であつて、宇都木阪の勝ち戦の時に討死をした。

こんな山畑を耕して居ても、尙御主の爲に命をまゐらする義理のあつたことは、悲しい話だと思つた。

奥平氏は忘れるほど古い時から、作手一郷の地頭であつた。東鄰の菅沼氏と共に、武田と徳川との間に挟まつて迷惑をした。結局意を決して長篠籠城の武功を立てる前には、あたら忠義の家來を討たせたのみか、武田へ人質に取られた妻と幼ない弟とは、門谷の金剛堂の前で磔に遭つて居る。市場の龜山にも川尻と云ふ處にも、屋敷迹がまだ残つて居るが、主は出世をして大名になり、もう故郷へは還つて來なかつた。縁組によつて次第に血も改まり、今の奥平伯などは、軍配團扇の紋の羽織を着て居ながら、品川の海では漁師以上の網打の腕前に誇り、作手出身の人のやうで無くなつた。

自分は作手を辭してから、西に向つて郡堺川の流に沿ひ、額田しもやまの下山を通



つて、松平村の高月院を訪れた。徳川家康から三四代前の先祖が寄進をしたといふ小さな田は、寺の横手に今でも耕され、其證文もちやんと寺に残つて居る。英雄の故郷としては爰も決してはでなものでない。それから自分には頻りに作手の奥の杉平が思ひ出された。

松平と杉平と、たつた一字の半分だけの相異だが、土地が天下に名を知られる機會の差に至つては莫大であつた。一方の杉平は一向にえらい人を出さず、村の名を記憶する者は多分私一人だ。運やら天然やら私にも分らぬが、何にせよ杉平だから、土の色も黒く北向きで水分が豊富で、兩側の山が急であつた。之に反して松平の方は、花崗岩の露頭の、白石爛たる小松山であつた。山川の流のちようど折れ曲りの角に當り、小さな盆地の村であることは同じでも、屋敷の後の岡に登ると、松の間から西參河の平原が見えた。作手

市場の奥平八郎左衛門の住居などは、要害の點では美まれたが、四方は濕地が多く眺望も何も無かつたに反して、松平の山には藤躑躅ふぢつじが多く、又月の名所でもあつた。

この松平の代々の太郎左衛門の一人に、連歌のすきな老人があつた。其頃大濱の稱名寺の念佛團の中に、何阿彌とか云ふ聖坊主ひじりぼうずが、折々招かれて來て相手をした。時衆などには珍しい人品で、諸國を行脚して居た故に話が面白かつた。生れは遠い上州だと謂つたが誰も身元を調べたのでは無い。普通で無かつたのは息子を一人連れて居り、それが又發明な器量の好い青年で、素朴な松平人に愛せられた。或は何等かの戀物語があつたのかも知れぬが、そんな事を語り傳へるやうな時世では無かつた。兎に角に斯う云ふ和合が元になつて、所望せられて入聲となり、其間に生れたのが、紛れも無い徳川公爵

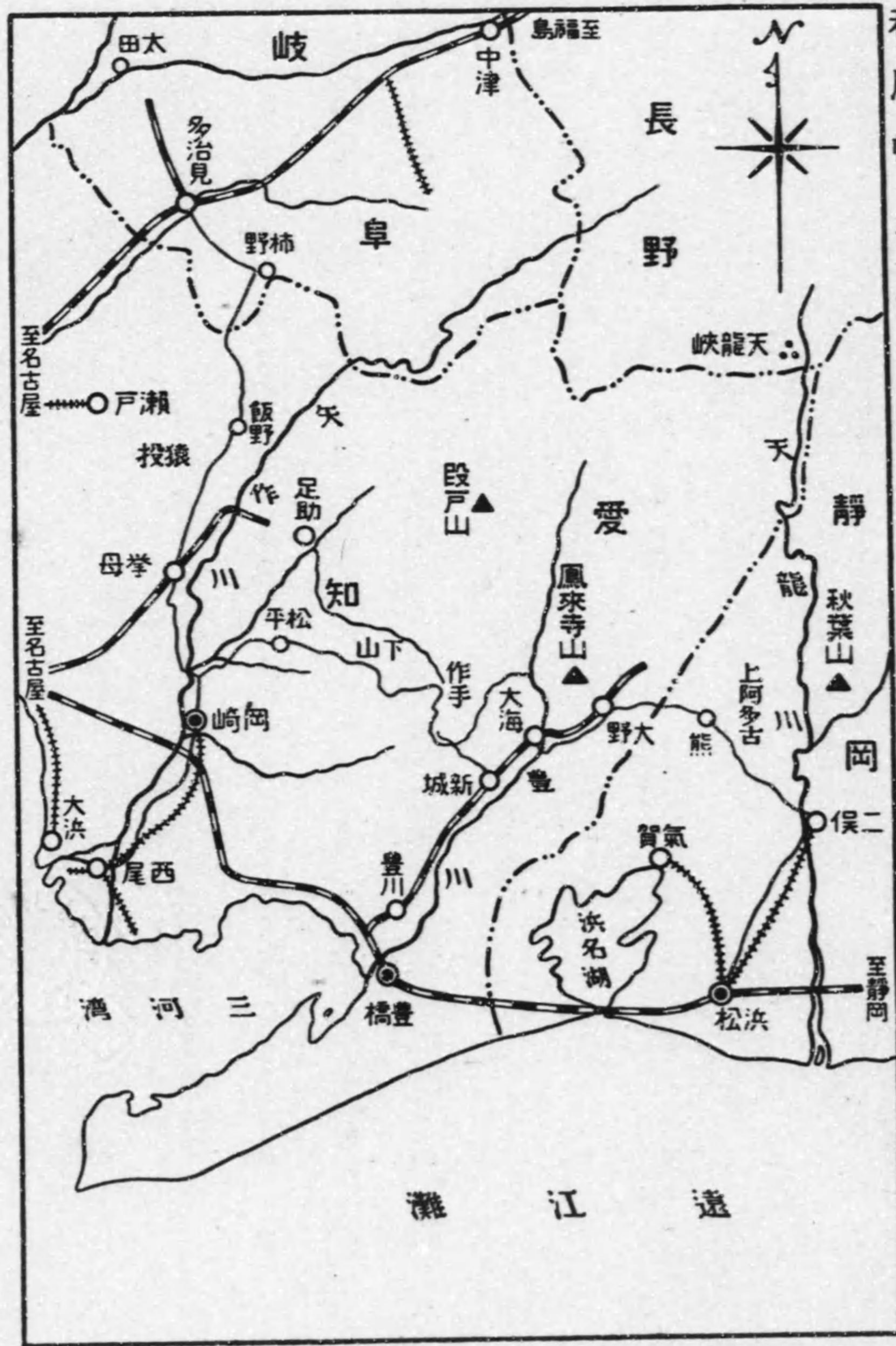


の先祖である。

だから若し地を替へて此邊が杉平だったら、とても其様な奇抜な血の改良は六かしかつたかと思ふ。此種の縁組の結果は大抵の場合良である。それからは小規模ながらも、代々續けて豪傑が生れた。松平の岡に登ると、川下の岩津の山は誰が見てもよい山だ。乃ち久しく心掛けて居て、便宜を見定めてそれへ引移つた。岩津に住んで居て尙工夫すると、岡崎の方が更に形勝である故に、又策略を廻らして之を乗取つたのである。

それから後の事は歴史に載せてある。之を要するに人の顔さへ見ると、無暗に松平の苗字をくれて遣つて、日本を松平だらけにした。二十世紀になつても、人が皆よい苗字だと思つて居る。米合衆國などできへ、今の大使の以前にまだ幾人かの松平といふ名士を識つて居たのである。さうして杉平の方

秋風帖 大正九年十月





はどうだ。

我々の生れた家の後の山に、松があるか杉の木が立つて居るかの、輕んずべからざること此の如しと言はうか。或は又松平たり杉平たる何かあらんと言ふか。何れにしても我々の、到底土の子であることだけは、斯うして證據立てるからは認めねばならぬ。それとも又杉平の暗い谷に、有明月夜の風情は味はへすとも、夜話すきの庄屋の隠居はあつたかも知れず、何も連歌と念佛がはやらすとも、零落した名士が来て食客をしたかも知れぬ。即ちさういふ縁組の太郎左衛門の家のみに成立つたのも、たくましい子供の生れたのも、乃至は三河の山奥の多くの松平のたゞ一つが、松茸と薪の産地として終らなかつたのも、すべて皆天意であり、又は史的偶然であつたのであらうか。あの杉平の村の村民の爲に、何とか一つ判断を下してやりたいものだ。



還らざりし人

上

和田君などは岡崎にちやんと親の家が有るのに、宿帳に笑ひながら其番地を書いて、我々の旅館に泊つてしまつた。さうして翌日に爲つて大人に逢ひに往つた。晩には又「おい、君」と云ふ程度の數十名の知人と會食して、夜汽車で東京へ還つて行くのだ。そんな事をするから、愈々我が眞澄翁が氣の毒に爲つてしまふでは無いか。

62

菅江眞澄は二十八の年にこの岡崎を出て、約五十箇年の間北日本に、家の無い生活を續けて死んだ學者である。墓は秋田の寺内村の古四王神社の附近

に、是も今は絶家した鎌田氏の墓地を借りて營まれて居る。晩年最も親しかつた鳥屋長秋の碑文にも、年は七十六七とあるだけで、詳しい經歷は舊友の子孫も傳へて居らぬ。岡崎では曾て其様な人が、生れ且つ去つたことを知つて居る者さへも無いやうであつた。實に怖ろしいのは百年の力である。

彼は歎き悲しみつゝ次第に故郷を遠ざかつて往つた。四十頃までの日記には其悲しみの歌が幾つと無く見えて居る。最初は足助あすけあたりから、矢矧の川上を越えて出たものらしい。其時分の紀行は美濃路で水の中に失つたと自ら謂つて居る。今在るものは天明三年に、信州下伊那から筆が起してある。即ち世に所謂眞澄遊覽記の第一卷である。遊覽どころか斯な苦しい旅であつた。伊那から次は諏訪筑摩、更級の月も見れば戸隠にも參詣したが、同じ處には永く足を止めず、翌年は越後國を通り抜けて、秋の末に出羽の庄内に入つて

63



しまつた。其から以後は只北へ進むばかりで、文政十二年に此世を辭する迄、終に日暖かなる東海の岸には出なかつたのである。

さうして毎に故郷を思慕して居る。一つには新たな生活の絆を求めなかつた爲も有らうが、還ることの出来なかつた不思議な事情が、殊に彼の旅を淋しくしたやうである。或は繼母に憎まれて、家を追はれたと云ふ説も有つたが、根の無い推量である。眞澄の日記には二親の安否を氣遣つたことが屢々書いてある。しかも音信を通じたやうな様子も見えぬ。家では恐らくは出た日を命日として居たことであらう。誠に萍の如き生涯であつた。豊かなる天分を持ちながら、土に根が無いばかりに其花は賞翫せられなかつた。

其代りには彼の遺書に由つて、旅行が一の大なる藝術なることが立證せられた。時代の拘束の多い歌よりも繪よりも、漂泊其物が自在に彼を清く美し

い境に導いて居る。所謂遊覽記は單に之を世に留めた樂譜の如きものである。彼は限ある島國の偏土に於ても、尙季節と地方とを按じて珍らしい旅行を續け、未知の諸州に於て到る處、泣いて別れる程の友人を見出して居る。人情と山水との最も秀麗なるものを綴り合せて、愁多き其孤獨生涯を彩色せんと試みて居る。

## 下

眞澄翁の旅の跡は「奥の細道」よりも自由に、又「採藥記」よりも更に大膽であつた。どんな立派な地圖に相談しても、とても計畫の出来ないほど、宏大にして同時に閑靜な逍遙であつた。旅を命とする人の魂以外に、何物も彼を此路に導き得たものは無い筈である。



出羽では三山の參詣から、酒田を経て將に滅びんとする象潟へ、最初は古  
併人の足跡を辿つたが、其より西馬音内に山を越え、小野小町が出たと云ふ  
雄勝郡に遊んで後、次第に雄物川の岸づたひに、秋田の城下の方へ下つたや  
うである。日記は此間四月ばかり絶えて居て、次の卷は男鹿と津輕との國境  
の、今でも淋しい木蓮子の漁村から始まつて居る。深浦と鱒澤は夢の花咲く  
湊であるが、其中程には大間崎の荒濱が有る。南に天女の衣のやうな男鹿の  
遠山が隠れる時、北には龍飛を越えて松前の山が見え、大島小島が波濤の上  
に浮んで来る。岩木山の麓を東へ廻ると、弘前郊外の豊かな在所には、風流  
の士が多かつた。此等の人々とは約束が有つたと見えて、十幾年かを隔て、  
又來て長く遊んで居る。

併し初度には僅かしか津輕に留らず、矢立を越えて比内に入つて往つた。

即ち鑛山以前の淋しい北秋田郡である。それから鹿角二戸の山村を経て南部  
領に入り、北上の流に附いて南は水澤平泉の附近まで下つて、水の暫くは淀  
むが如く、二年足らずを此邊で過した。寛政元年には齡三十六七であつたが、  
忽然として再び北征の長い旅に上つて居る。今度は岩手の靈山を左に取つて、  
盛岡も過ぎ野邊地も過ぎ、青森油川も一夜づいで、三厩の泊に風を待ち、真  
直に蝦夷地に渡つてしまつた。固より彼は冒険者では無かつた。松前藩の上  
流と交つたのは専ら文藝の方面であつたが、而も折々は遠い浦々を巡つて、  
漁具や海の草の種類を問ひ、又は淋しい雪中の小屋に宿を借りて、行脚の僧  
と故郷を語り明した夜もあつた。アイヌに就ての親切な觀察を、數卷の書に  
編んだのは此四年の滞在の間である。十月茫々と風の吹く或朝に、便船は果  
知らぬ旅の客を、終に本土の一角に運び返した。下北半島の奥戸と云ふ湊で、



又草鞋をはいたと記して居る。南に向ふときは故らに遅々として行つたかとも思はれる。如何なる新因縁に催されたものか、假の宿りの宇曾利山下の町や村に、更に四年の春秋は算へられた。或年の冬は深い雪を冒して、尾駸をがら小川原の沼の邊まで出て来たこともあつたが、旅は悲しいと云ふやうな歌を詠んで、再び田名部たなぶの知人の宅へ、戻つて往つて正月を迎へた。

一年將盡夜 萬里未歸人

寥落悲前事 支離笑此身

斯な詩を口ずさんだやうな除夜の晩を経験して居る。支離と謂ふのはかたわのことで無かつたかも知らぬが、眞澄は年老い十餘年の津輕の旅を切上げて、土と爲るべく再び秋田領に入つた頃は、時の間も頭巾を離したことが無いので、常被りじょうかぶと云ふ綽名を付けられたさうである。此頭巾で所々の花紅葉を訪

ひ清水を尋ね、美しい繪を描き紀行を遺した。男鹿の半島だけでも六種の日記がある。さうして雪月花の出羽路と題する數十卷の地誌を半成にして、或村の神官の家で、第二の歸らぬ旅に赴いた。死んだ後に事を好む若者たち、餘りとしても不可思議なる廿五年間の頭巾を、取つて見て真相を知らうとしたが、老人が之を制止して果さなかつたと謂ふ。恐らくは大きな刀疵でも有つたのだらうと謂ふ人もあるが、それは只有りさうな推測に止まつて居る。永遠は毎に色々の傷を包んで往つてしまふが、殊に此翁の後姿は、いつ迄も見送つて居たい感じがする。(三州岡崎)



## ブシユマンまで

桓武大帝の延暦十何年かに、若い昆崙人を只一人乗せた船が、三河の海邊に漂着したと云ふ故跡は、今の矢矧の古川の右岸に在る、天竹てんちくと云ふ村であらうと謂ふことだ。此青年も還らざりし人である。常に悲しい聲で何か歌つて居たと、記録にも見えて居る。耳に環をはめたこの黒い男の血は夙に紛れてしまつたが、我々が木綿の種を知つたのは此時が最初で、しかも後代に及んで幡豆はづ海邊の低地は、見渡す限り綿畠の白い波であつた。それが元の種からで無かつたとすれば、愈々奇なる偶然である。

江戸で三白と稱へたのは三河白木綿の略である。此ばかり曲尺で三丈二尺

を一反とするのは、専ら看板腹掛足袋股引の材料とした爲だらうが、何故に特に此地方の産を賞美したかはまだ分らぬ。維新以後其需要が急に増し、一方には紡績の機械が早く利用せられた結果、支那から綿花の入つて來たのもやはり此邊が最初であつた。さうすると織るばかりが農家の作業に爲つて、絲を引く仕事は先づ村落から離れてしまつた。絲と木棉と交易した小買と謂ふ制度が、いつか賃機と爲り、終には全部工場の管理に歸したのは、他の地方も同じである。

併し水車を利用する紡績だけは、今以て岡崎近傍の特色である。土地では之を「から紡」と呼んで居る、臥雲とか云ふ信州の僧が工夫をしたと云ふ傳へもあるが、もうそろ／＼崑崙漂流式に話がなりかゝつて居る、實際家には沿革は必要が無い。何かと謂ふうちに男川筋から郡塚川、其他の小流れの岸ま



で車小屋を建て續けた。處がさあ綿と謂ふ時代に爲つて、輸入免稅が先づ土地の生産を絶やし、次には精巧な機械の競争を受けて、外棉加工の利益が望まれなくなり、再び曲折して今日の彈き綿はじの作業に向ふに至つた。短い歲月の間には實に珍らしい變化である。

是から後も必ず變化するだらうが、我々は只悲歌する所の昆崙人である。

見やうに由つては今が究竟底かとも感じられる。屑木綿をほぐして綿にする作業なども、殆ど智慮と技巧とを盡して居る。近頃では染料を節約する爲に、初に屑物の色分けをする。紅が、つた木綿切を集めて、所謂煉瓦色の太い絲を引く綿に弾いて居る。格別面倒な調合はせずとも、古いから自然にそんな色合に爲る。其絲でざつと織つた大幅物が、毛布と云ふ名を帯びて阿弗利加の内地へ行くさうだ。近年まで白耳義の商人が賣つて居たのを、戦争以來ダ

アバンあたりから日本へ買出しに來た。嗅覺ばかりが大いに進んだあの方面の御得意様は、何と我々を呼んで居るか知らぬが、どうやら以前と異なる香がする爲に、此頃漸く日本の存在を承認してくれたことと思ふ。他日此生蠻の歴史が夜明けた時、くり舟に乗つて漂流するやうな東海人の文明は、果してどんな痕跡を其上に遺して居るだらうか。出来るものなら今一度後に來て見たい。



茂れ松山

二十年來汽車で通るたびに、自分は遠近の岡の色の、次第に美しくなつて來るのを感じた。此綠なる天然に隠れて、幾人かの裕福な學者が、各其書庫を擁して老いす衰へず、靜かに研究を續けて居るかと思ふと嬉しかつた。併し今度のやうに歩き且ついで見ると、やはり花は落ち水は流れ、人は去り鴉空しく啼くと云ふ淋しい野も有つた。一方の禿山の芒を引剝いで、此方の砂防工事の堅固にするやうな只の變化も些しは有つた。

地方の篤學者の永く憬慕の的と爲つて居るのは羨ましい。此でこそ帷を垂れて生涯を讀書に送つた甲斐がある。唯平凡なる悲しみだが、彼等はあまり

に夙く過去に屬して居る。豊橋の波多野氏などは子孫が家の學を見棄て、其藏書印の有る本が處々に散つて居る。西尾の岩瀬文庫にも大分購入せられたさうである。刈谷の村上氏の蒐集の如きも、もう彼家のもので無くなつた。父子合著の書物なども出たやうだが、まだ完全に其文庫を利用し得なかつた筈である。自分が若い頃に名を聞いて、一度は門を叩いて見たいと思つたのがもう此通りである。

併し一軒の家の變遷とは獨立して、學風は幸ひに世に傳はることと信ずる。現に文庫を愛する好い癖だけは、三河の國振と爲つたと謂つてもよい。右の村上氏の集積などは、殆ど全部が刈谷の圖書館の有に歸した。土地の人安戸醫學士の寄進ださうである。醫者には昔から志の深い人が有る。長篠の牧野文齋氏の如きも、巨費を投じて熱心に郷土の書を購ひ又は寫させて居る。私





かに一人の家の寶とするに比べると、どの位學問に近くなつたか分らぬ。是以上は單に近づき得る人の有りや無しやだけが問題である。

岩瀬文庫は一旦公開して後に又閉ぢて居る。擴張の爲に却て歲月が空しく過ぎてしまふ。此文庫には弘く海内の書が集らうとして居る。珍らしい畫卷などの外に、或は度會氏の舊傳を調べた編集と謂ひ、柳原伯が賣られた大切なる記録日記の類と謂ひ、何れも行く行くは西尾を有名の地にするものである。但し整理中でも學者は老いて止まぬものなることを考へたら、尙少しく終局の目的の方へ、急がねばなるまいと感じたことである。

西尾には鍋屋と謂つて、何と言つても本を貸さぬので有名な家がある。同じ幡豆郡の寺津には、あまり貸したので大分無くした渡邊政香と云ふ人があつた。渡邊翁は三河志と云ふ大著を未完成で遺し去つた學者である。此本は

後に鍋屋に歸し、もうとても見られぬことかと思つたら、西尾の小學校に二部の複本と一緒に置いて置いてあつた。作つた人の心持を考へると、死後には一人でも多くの學者に見てもらひ、増補訂正を必要ならばさせたかつたらうに、誠に此邊の善人たちは、何故に古書が貴重なるかを解して居ないやうである。



秋の山のスケッチ



### 秋の山のスケッチ

おう、竹さんどうした。をら死んだかと思つたぜ。あまり酒がえらいでえ。

時は大正九年十月三十日の朝の九時過ぎ、處は三河美濃尾張の境なる三國山の東、金毘羅様の峠の大きな松の樹の蔭である。斯く謂ふ人物は、大きなカバンを自轉車にくゝり附け、此手帖の主を案内してくれる飯野の經師屋、年は四十三四、清洲きよすずの生れで方々を知つて居る一癖ある男だ。竹さんは六十に近い親爺、だまつて聽いて徐ろに煙草入れを抜いた。つれが一人ある。

竹さんは美濃みのの下石おろしの鶴仲買人である。まだ鳥小屋とりこやの前景氣の時分に、此邊の村をあるいて高い値で鶴を買ふ豫約をした。さうして今になつて遁げま



はつて居るのである。それを取つかまへるのが一つの目的で、私の案内者を志願して来たことが今わかった。カバンの脇の風呂敷包は、何かと思つたらみな鶉であつた。果して圖星に中つたので、大得意で調子が高い。不義理の竹さんは一言も無く閉息し、澁々十圓何がしを爰で勘定して、高價な鶉を文字通りに背負ひ込んだ。

多治見からも鳥が来る。東からも鳥が来る。麴は出す。さつぱり値が出ず。なるだけ値を殺してくれ。もう此値では買はぬと思つてくれ。をれもはたしはつらい。

東と云ふのは木曾の妻籠つまごから阪下の邊のこと、あの地方でも山の鳥屋こやで、到る處に鶉を取つて居る。

麴漬の麴が間に合はぬときは、鶉ばかり買込む製造家は少ないから、相場

がいつも安いのである。

鳥屋こやの衆は多く来れば悦ぶが、仲買は多く捕れては困るのだ。をら約束したとやが七十からある。

をれの方は三十四だ。

此天氣では今朝も大分捕れたらう。あれ、あんなに鳴いて居る。

此風では來るぜ。をれは胸が痛くなる。

全體はじめに十錢ときめながら、十三文にも十四文にも上げたが悪いのだ。さうだ〜。

十四文とは一羽十四錢といふことである。經師屋はもう取る者を取つたから、いい氣で泣言の相槌をうつて居る。

此中にはトラが四つある。始末をして置いてくれ。



トラとは虎鶉トウ即ち鶉トウのことで、禁鳥だから見付けられぬやうにせよと謂ふのである。夜明前の眞暗闇にヒューヒューと啼いて来る。幾ら萬葉集に「ぬえこ鳥うら鳴きをれば」などと詠まれた大切な鳥でも、飛んで来て引羅るからには仕方が無い。

禁鳥はみんな嘴が細いのに、どうして鶉だけは、嘴が太くて禁じられて居るのでござりましょう。

蟲は捕つて食はなくとも、やはり数が少なくて絶えるといけぬから、禁じて居るのだらう。

はい、あ、さうでござりますか。

斯んなことを話して柿野の村へ降りて来ると、なるほど五十七の鶉を棒にとほして、右からも左からも人が通る。日當りにおこり囚の籠をならべて、鳥を洗

つてやつて居る家が多い。店には紙の看板に、

モヲチエゴマ有り升

と云ふのが方々に見える。モヲチとは麩のこと、荏胡麻は囚の鳥の餌用である。山の方を仰ぎ見ると、高い低い崖の頭のやうな處に、幾つと無く枯れた竹の圍ひがある。それが皆とやである。木曾では松の大枝をさし、又は天然の松林を利用して居るが、此邊ではこんな簡単なことをして居る。それでも年に何十萬の鶉が、中部日本の山山では捕れるのだ。



向  
小  
多  
良



### 向 小 多 良

自分は天下多數の佐藤君松田君波多野君河村君等と共に、共同の先祖として田原藤太秀郷を仰ぐの光榮を有して居る。之に由つて昨年の十一月には、右中興の英傑の名字の地を見て來ようと思ひ立ち、妙な取合せながら大阪に於ける講演の序を以て、近江の信樂しんがきから紅葉の多い山路を越えて、城州の宇治田原の靜かな谷へ入つて見た。宇治橋の歴史は比類稀なる大變遷である。そも武内宿禰の雄々しい歌物語に始つて、橋姫の信仰は乃ち美麗なる源氏の君の艶話を潤色し、一方には又頼通頼政から、近世の通圓幸齋が生活の痕まで、悉く此橋の袂に纏綿して居るかと思ふと、今は又水に臨んだ大阪電車の



花やかな燈火が、此川水力發電の偉業を描き出して居る。しかも誰か思はんや、百歩の川上には喜撰の歌法師、その又上流には猿丸太夫永く幽居の名残を留め、更に奥深く入つては我が田原殿あつて、爰に一區の美田を子孫の爲に經營し去つたことを。

宇治田原は瓦屋根のやうな地形である。僅かな屋の棟を水分れにして、近江の田原と一續きである。秀郷が領して居たのは近江の田原だけと云ふ説もある。併しそれでは「仍て田原藤太と名乗つた」と言ふのには、餘りに分内が狭い。此家の本領は固より東國に歴としたものがあつたが、京近くの莊園は恐くは父方の特權を繼承したもので、是有るが爲に只の田舎武士に比べて、遙かに優勝な地位を保ち得たのであらう。其頃逢阪の關路は今の横濱の如き都の玄關であつた。秀郷出京の折にはやはり勢多河の流に付いて、湖岸の官

道まで下つたものであらう。野州の植民地の往來も勿論同じ路であつた。爰に於てか威名は此附近に鳴り響き、琵琶湖の龍神までが彼の武勇を熟知するやうになつたのである。

家の自慢は假令千年前の事でもやはり失禮に當るから、是より以上には説き立てぬことにする。さても近江の貴生川驛きぶかはで汽車を降り、犬が綱曳く人力車を傭つたことであつたが、此車夫は移住者とも見えぬのに、ちつとも田原殿の事を知つて居らぬ。自分は長野の町を過ぐる迄、わざと話を瀬戸物の火鉢などの問題に低徊させて、徐ろに田原の古今に及ばんとすること、恰も若い猫の鼠を弄ぶが如くであつた。「且那は何處へ御出でるのです」と聞くから、田原へ行くのだよと少しばかり得意な返答をして見たが、どうも其からの話は調子が合はぬ。タア口なら此道ですぜと左の方を指したり、朝宮の道だと



城州へ出てしまひますと當然の事を言つたりする。そこで不見識であつたが五萬分の一の地圖を車上にひろげ、車夫の言と對照して見ると、結局此先生の腦中には、宇治田原と云ふ地名が全然無かつたこと、従つて自分の田原と彼の多羅尾<sup>たらを</sup>とが、混雜して居たことを發見した。多羅尾ならば信樂の御茶と共に、自分も夙くから知つて居るが、其が我々の田原と聞誤るやうなタアロであらうとは思はなかつた。

そこで車の上で斯な事を考へた。語勢や「なまり」の經驗も無くして、無暗に地名の比較研究を發表するのは劍呑である。田原は今日まで稻作に適する草地の意味と思つて居た。山に據つた里に此名は多い。大野君の在所相州の波多野莊で秀郷の子孫の拓いた村にも田原が有る。現に又自分の生れた村も同名であつた。猶又大和其他の國にも古い田原がある。何れも田の原と解して

もよく通ずる。一方には多羅尾のタラ、是も亦多い山村の地名である。天武天皇紀の壬申の亂の條にも伊賀の荊萩野<sup>たらか</sup>などがあつて、若芽を食用に供するタラと云ふ木、刺の怖しい所から我々が幼時「よめたき」などとも呼んで居た植物の、簇り生ずる山野の地を、開墾前の名稱のままに唱へて居るものと考えへて居たのである。併し此様子では二つの地名は元は同一で、之を文字にする際に多少音韻上の無理を忍び、見た處さうかと思はれるやうな語に變へたこと、恰も近世の蝦夷樺太の地名の類では無かつたらうか。萬一さうであつたとすれば、犬を相棒にして居る長野の車夫は、えらい事を口傳して居たものである。

是は併し空想かも知れぬ。結局は文字に據つて解した通説が正しいのかも知れぬが、タラと云ふ地名も此外に中々多く、其全部を此木の多かつた爲と



断定するには、植物生態の研究が必要である。更に又地形の異同も考へて見ねばならぬ。近江の近くでは若狭の太良の保がある。美濃の時多良の多良村は或は鱈尾たらをとも書くさうである。其ばかりでは無く、此邊には何々ダアラといふ地が至つて多い。ダアラは又ダラとも謂つて居る。タヒラの訛音かと思へばさうでない證據に、是は多くは阪路である。唯附近の山地と比べて傾斜が遙かに緩く、所謂段層耕作に適するだけの、地味と水利とを具へて居る爲に、早くから村になつて居るのである。

ダラの例は至つて多いが、有名なものは殆ど無い。唯一つ自分の記憶して居るのは、美濃の長良川のすつと上流、長瀧の長瀧寺と云ふ白山南表の大寺の址へ行く途に、白鳥といふ市の立つ一村がある。越前の穴馬あなまから油阪を越えて買物に出て來る處で、昔の軍事上の要衝である。この白鳥と川を相隔て

て、ムカフコダラといふ一部落がある。東を向いた一箇の入野で、草木と茅屋と隠翳して趣を成す古風な里であるが、何故か以前から人氣にんきが悪く、市へ出では酒を呑み喧嘩を始め、勘定でも踏まうと云ふやうな人が多かつた。其をつひ近年になつてから、村の有力者の志深い者があつて、色々として子弟に貯金の興味を覚えさせ、後には親たち迄も少しづつ感化して、家業に熱心するやうな氣風にしたといふ話であつた。自分が縣道の岐路から此村を眺めて、村の様子も其名前も、共に面白いと感心して居ると、校長の鹽田君が、かう云ふ歌が昔からありますと教へてくれた。

向ふ小だらの牛の子を見やれ、親がくろけりや子も黒い。

ほう其は又大に面白い。處が十年來の種畜改良の結果、此節では色々の斑ら牛が、此村からも出ると云ふでは無いですか。私ならばかういふ風に歌はせ



向小多良

たいものですと即吟の一句、鸚鵡小町の故智を學んだものであるが、恐くは今は自分以外に之を記憶して居る人もあるまい。

向ふ小だらの牛の子を見やれ、親が黒うても子は白い。

(大正八年五月、同人)

木曾より五箇山へ



木曾より五箇山へ

明治四十年五月二十八日、晴、雲多し。

木曾の上松の宿屋境重まかぢうの横手より、田の畔道を川端へ下る。道の上で働ける鐵道の工夫等、頻にばら／＼と土や小石をこぼす。

木曾川を西へ渡る、こゝにも名物の釣越つりこしは有れど平水には舟にて渡す。三留野どの青木君、自ら鐵條の綱を手繰る。

茲に落合ふ川は小川といふ。小川の澤は眞直に西へ入り、東の方駒ヶ嶽の雪と相對す。駒ヶ嶽の雪より滑川といふ急傾斜の川流れ下る。空澤からさはなり。上松の民家はあたかもこの十文字の結び目に在り。



小川越の頂上を高倉と云ふ。西に御嶽、東に駒ヶ嶽を一時に見る所なり。閑古鳥啼く。

小川の奥は凡て御料なり、左手の初めの澤は麝香澤。此澤の檜は最も名木なり。麝香澤は檜の高き香より付けた名なるよし。

次の澤は南の股、北の股。南の股に來て初めて柚木そまきを曳く古代の掛聲を聞きたり。木曾の柚は今でも決して大鋸おほがは使はず、木の前後より斧おほひぐちを入れるなり。倒るべき方を受口と云ひ、反對の方の切目を蔽口と云ふ。大木は三方から斧を入れる。之をば弦掛と云ふ。鼎の脚のやうに残したる三脚の、一つを切放せば向側へ倒るゝなり。

大木の倒るゝ音は烈しきものなり。中空に非常な塵が立つ。谷には日傭が鳶口の音、さいたはつたの差圖の聲、嶮しき労働なり。我輩が生活は之に比

ぶれば遊樂に近し。

檜の枯林の中に、萬年草の廣場あり。樗鳥は地から三尺ばかりの處をあちこちと飛廻る。其間に山の労働者の小屋あり。檜皮ひはだにて隙間だらけに圍みてあり。

五月二十九日、きれぐの雲、一度は雨。

小川の北の股より、王瀧村の瀬戸川の奥へ越す。山道半ば棧道なり。源頭の森林には却つて平地多し。溪流の力の未だ十分に排水を爲し得ざる林地に、昔焼畑を造りし跡あり。ゾレと云ふは焼畑のことなり。

石楠花花盛り。淡紅と白の二種、共に優しく柔なる花なるに、葉の色はまことに無骨なり。新に檜の柁板にて造れる柁小屋あり。黒き常磐木の林の中に美しく光れり。



王瀧村の上島にて晝飯を食ふ。此より川上にも人家はあれど、先づ此處が山と世間との境なり。

王瀧川は木曾川本流よりも立派なり、本流は國道を頼みて天下に聞ゆれど、實は根からの凡水なり。

上島より上に大字野口、王瀧川が作りたる大野の入口なり。山の中腹に巖石の露出する所を、此邊にては皆ゴウロと云ふ。

氷ヶ瀬まではよき道なり。左は美濃の付知つちへ行く新道、右の山道に入る。

苦しき峠あり。

柳ヶ瀬には一軒屋あり。母と夫婦と女の兒二人、亭主は病身なりとて、容貌少年の如し。

濁川こゝにて王瀧川に落合ふ。御嶽の地獄谷より出づる川なり。上流にぬ

るき温泉あり。下り行きて泊る。

深夜に湯壺にて、美濃の加子母かしもの老人と話をす。十五六年前まで群馬縣に行きて住めり。妾に男女二人の子ありしを、其妾にやりて獨り故郷に還りたりと。博奕の好きさうな爺なり。但し今はよほど衰へて居る風なり。

五月三十日、快晴。

再び王瀧川の澤に引返し、猶川上へ行く。駒鳥昨日より到る處に啼く。

瀧越は十七戸、峻しき峠を二つ越え、三里餘にて漸く上島うはじまへ出ると云ふ山里なり。太古の川底なりし平地を十町餘耕作す。世間にては三浦とも云へど、三浦は此奥山の總稱なり。全村皆三浦氏なり。相模の三浦の殘黨と云ふも旁證なし。兎も角も武士の落人なるべし。どの家が一番古いと云ふことの外、一の記録も口碑も無し。女は丸々世間を知らず。美濃より來て此村に永住す



る教員の夫婦ありと聞く。御寺も醫者も無し。

山査子さんざしなるべきか、土地にて小梨といふ花を、手桶に一杯折り來りて軒の下に置けり。家主が歡待振なるべし。檜皮にて編みたる一尺ばかりの四角な籠、山に行く者は必ず持つ。新しきものは色合何とも言はれずうつくし。

又一つえらい峠を越す。越して再び王瀧川の岸に下る。小路は去年の洪水に損じたれば、川の石の上を歩む。深山の景色を畫く者、常に晝尙暗しといへど、此溪は極めて明るし。思ふに今日は此の如き好き天氣なり。此川は中廣き川にて、兩岸の崖遠く、しかも川の石はすべて花崗石なる上、水の邊は針葉樹少なく、奥山の木は今が若葉の薄緑なれば、取集めて斯く明るく感ぜらるゝならん。靜かにて明るきはよき感じなり。處々の瀬に美濃の岩魚釣いはなつりを見る。久しく物言ふことを忘れたる人々なり。

若葉の林の日影をよろこび、熊笹の刈株を踏みて行くうちに、谷は次第に開けて水の音少しく遠ざかり、又檜樅さくらの原始林に入る。土浦の澤には針金の釣橋を渡る。御料所屬の休泊小屋の前に休む。

枉小屋と云ふ所にて、愈王瀧の本谷に別れ、左へ水無澤を上る。枉小屋は今は無くなり、其跡に藕もろ小屋あり。瀧越の男三人、こゝに來りて夏中藕を製す。此邊すべてつめたき水溜なり。芍薬花さく。

鳩啼く。聲が里の山鳩とは異なり。青鳩ですと文六は云ふ。今一人の同行者、あの位うまい鳥はありませんと云ふ。鳩は之に構はず平氣で啼く。所謂妻を呼ぶ季節なりと見ゆ。

ごみ澤を上りきりて、三國山の頂上より八町北に出づ。美濃飛驒の山の額百ばかり遠近に見ゆ。處々の煙。



嶺通りに數十の塚あり。遙に御嶽の方に列れり。根笹其上に叢生す。何れの時代にか國境を定めたるものなり。

人の爲の峠は又渡鳥の通路なり。去年の鳥屋猶存し、霞網の竿なども残り居れり。

屋根の少し窪みたる所、岩のごろくとしたる所が飛驒への下口なり。五六歩下れば岩ぬれたり。これが竹原川の源頭にして、我等はその最初の涓滴より道連と爲りしなり。川より外に道なければ、岩より岩に飛び、自分も一種意識のある瀧と成りて里に下る。

初めて見たる飛驒の人は、兄弟三人の草刈なりき。眼と顔と皆圓く、中は娘なり。躑躅咲く松原まで下りて来て振返り見れば、まことに暗く淋しき谷なりき。

文六は瀧越の者なれば、水を飲みながら、木曾の水はどうまからずと云ふ。まことに木曾はなつかしき山なり。飛驒の家も木曾と同じ板屋なり。

竹原村の御厩野と云ふ里に出づ。美濃の加子母へ越ゆる縣道の峠の口なり。或家に息ひしに朴の葉に包みたる鮓をくれたり。

竹原川はこゝにて最早立派な川なり。その益田川に合流する所迄を見届けて、下呂ひらの吉村屋に来て寝たり。此町は以前河原に温泉あり、故に湯之島とも云ふ。今は洪水にて水底になりてたゞの町となれり。

五月三十一日、けふも上々の天氣。

下呂より小坂まで人力車。道は益田川の岸、桑島の中、出逢ふは桑の葉を運ぶ車及籠なり。

小坂より右へ、又落合川の上流、唐谷の御料林に入りて伐木を見る。此道



三里餘。

山の小屋に宿す。夜月よし。蛙啼く。

初めて蕨の粉を食ふ。これより北の山里、秋神の柚の者携へ來りしものと云ふ。

六月一日、晴。

山を下る。柚の頭なる老人、途中まで案内して、木を流す堀川を見せる。竹の杖をつき、鹿の皮の山袴をはき、熊の皮の尻當をぶら下げたり。その寫眞を撮りしがよく寫らす。

山の杜若花、草の丈三寸ほど。谷の向うなる峻しき山に、藤の花極めて多し。谷に臨みて大木の栃あり。花満開、花の数は千以上あるべし。朝日の影に全容を浴して、壯麗無上なり。道に墮ちたる花を拾ひ見るに、花片は淡黄に

して底の端を鮮紅に染む。兼々進化論には腑に落ちざる廉ありしが、果して栃の木などの立派なるは、生長と種類保存との爲には非ず、此木が三十丈高く、花の底の鮮紅なるは恐らく彼の爲に必要にも非ず。人間を樂しましむる爲と推定する方遙に妥當なり。

溪流の對岸は絶壁にて御嶽へつゞけり。絶壁の上は廣き平地にて之を原八町と云ふ。栗の天然林なり。之を見つゝ獨り山を下る。

道に四寸ほどの蛇を見る。子供の時燐寸の箱に入れて飼置きしことを想ひ出す。昔巨人が巨蛇と闘ひし頃より、人の方は約百世なり、蛇の方は何百代を経たるか、御互に當時の強烈なる憎惡と畏怖とを遺傳して、今日尙打解くこと能はず、何とかして完全なる平和を恢復し、同情の眼を以て彼の鱗の美を鑑賞したきものなり。

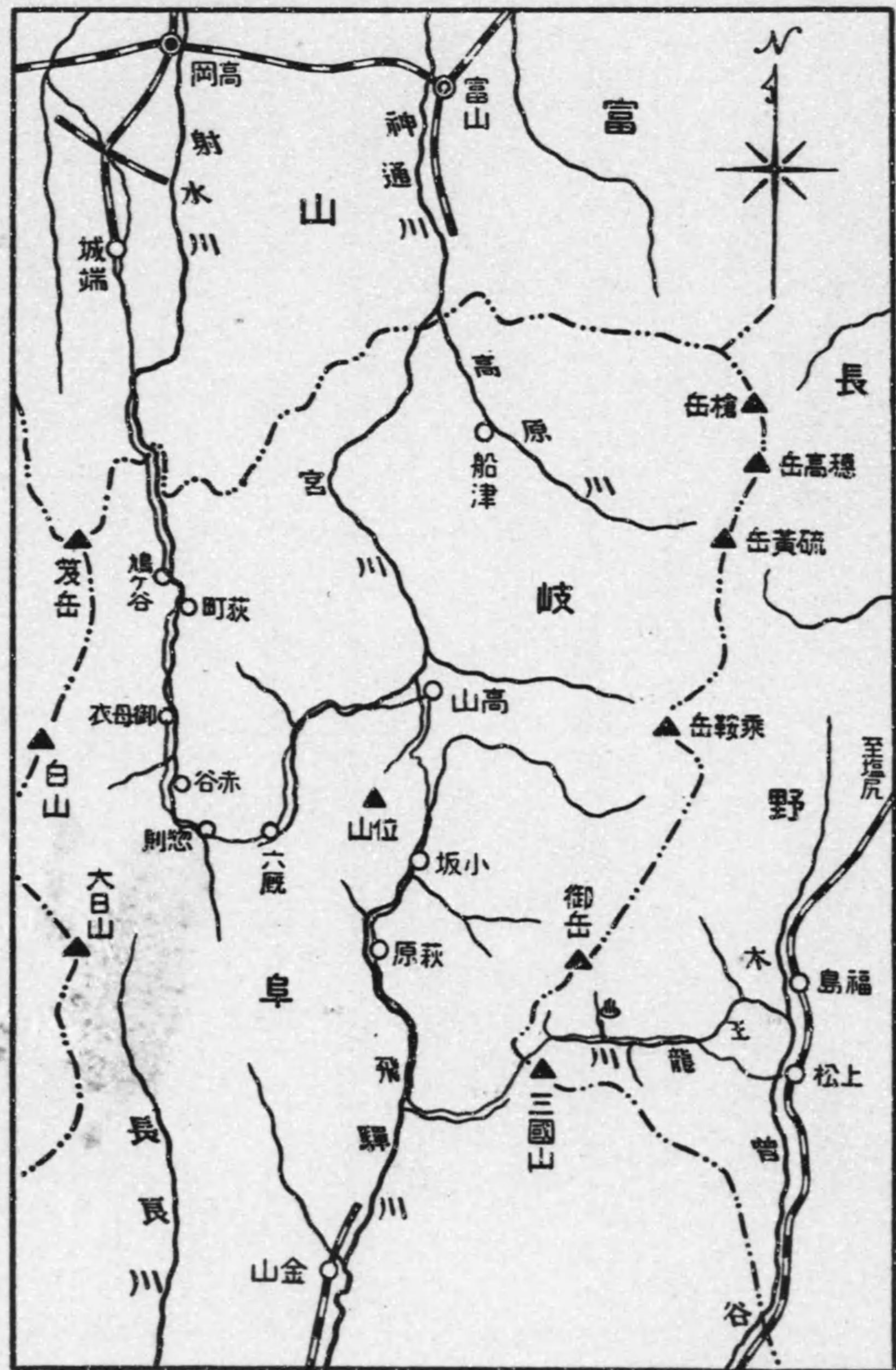


木曾より五箇山へ

溪も山もすべて青き中を、朝六の橋のみ白し。此橋を白く塗りたる人は心あるか。古き傳説をよく味ひて設計したるものか。

小坂より高山へ七里の車、途中こんな人々に出逢ふ。曰く、子持の女を載せたる人力。村會議員とも云ふべき男、手に團扇を持つ。旅稼の人夫二人又一人。職人二人、其一人は白衣。空の郵便車を曳く脚夫、笑ひながら来る。小學校の子供二人又六人。下駄材を積める荷馬車。萌黄の風呂敷包を負うた娘。脚絆猿袴の商人。米俵を負へる馬、空荷馬車。旅の農夫。荒物類の荷車。子供を三人載せたる村の荷車。土方。堆肥の荷車を引く百姓の夫婦。電信の工夫。農夫、谷川の水を見ながら来る。旅商人三人。下駄臺の荷馬車六。郡農會の技手と云ふ風の男。自轉車の高山人三人、やがて又引返し來り我車を追抜く。薬取の子供。石灰の俵を積む荷馬車。四十位の田舎の旦那、よき人

木曾より五箇山へ 明治四十二年





力車に乗りて來る。若き木挽。郵便車。乾物の荷車。石灰の荷馬車六輛又四輛。二人にて曳く荷車に病人の婆、こはい顔をして寢て居る。乗馬を引く者。空荷車、上に鹽物の籠一つ。農夫。子を負うた女。町へ出た百姓二人、又三人。夫婦にて曳く石灰車。高山の郵便配達人。買物に出た男四人。穀物の荷車。善光寺參りの老女二人。町へ出た人。躑躅を持てる女連三人等。

六月二日、午後僅かばかりの雷雨。

町見物、熊膽を求む。

宿の主人を招き白川村の話聞く。明日此山に入る用意を爲す。主人は越中の人にて、十五より二十三の年迄白山の東の谷に銅山を經營してありしよし。早く成功して早く失敗したる派出なる經歷あり。其頃の白川村は面白かりしとのこと也。



色々の訪問者に接す。飛驒は思ひし程の山國には非ずと言ひしに、少しく悦ばざる人もあるやうに思はれたり。

六月三日、晴、午後四時雷雨。

郡上街道を三日町迄。右へ折れて牧ヶ洞の峠、峠を下りて夏厩なつまやの村、時鳥無暗に啼く。此邊最も雪の深き所なりといふ。山の木はまだ都の四月頃の若芽なり。桃の花あり。

上小鳥かみせどりは寥落たる民居たり。山路板の車に行逢ふのみ。水力にて板を挽く僅なる小屋あり。又黄檗きはだを煮る小屋あり。とある野原には大木の梨の木七八本あり。年々よく實り、旅人來りて採り食ふ由。

行々小梨多し。即ち瀧越の手桶の花なり。紅白の二種ありて、白は李すももに似たり。六厩へ越ゆる小さき峠、満山此花の盛なり。遠く望めば林白く、近く

行けば、薔薇の香あり。珍しき花見なり。初めて旅に酔ふ。

贅澤なる言草ながら、丸々目的の無き旅をして見たし。毎年旅行に出づれど、まだ放縱散漫の趣味は解し得ず。旅行者の中には、自分は第二の階級に屬するか。親の大病で歸るほど無意味の旅行でも無けれど、さりとて遊歴の書家ほどの悠長さは無し。つまり興行人や間諜などの亞流なるべし。

六厩むんまやには焼畑多し、焼畑此あたりにては薙なと云ふ。此地は既に莊川村の内なり。輕岡峠にかゝり雷雨に遭ふ。板を頭に載せて雨をしのぐ人を見る。

小倉の洋服を着たる若き男、ふらくと來る。同行者曰く、あれは莊川村の助役なり。今日の村會にて辭職を可決せられて歸る所なり。酔つて居るなりと云ふ。

三尾河みをがわ・一色いっしき・總則そうのり・猿丸あらいだち・新淵あらたと來れば、莊川の流はやゝ大きくなり、淵には



鱒を捕る竹籠を掛けたり。路の側に少しの田、少しの麻畠あり。麻は蕪畑にも作る。以前は一村の衣料大方この麻なりし、ヌノと云へば麻布のことなり。夜、月色に背き、運送店の奥座敷に寝たり。

六月四日、晴、早天は霧。

此邊の躑躅は花大きく、色は濃艶なる朱なり。田の畔にも咲けり。田の畔に芍薬を栽ゑた家あり。

三方崩山、雪を戴きて遠く見ゆ。此溪谷の中心に當る。その直下に大字御母衣あり。一戸にして三十人四十人の大家族ある村々は、凡てこの山の東麓に列れるなり。

葉小さき山桑にて蠶を養ふ。枋の樹多し、この實は山民冬の間の糧なり。

莊川村と白川村との境は小さき谷川なり。川上に尾上郷と云ふ二戸の大字

あり。是より越前の大野郡へ幽かなる山路ありと云ふ。地圖には見えず。

御母衣に来て遠山某と云ふ舊家に憩ふ。今は郵便局長。家内の男女四十二人、有名なる話となりをれども、必ずしも特殊の家族制には非ざるべし。土地の不足なる山中の村にては、分家を制限して戸口の増加を防ぐことは折々ある例なり。唯此村々の慣習法はあまりに嚴肅にて、戸主の外の男子はすべて子を持つことを許されず。生まれたる子は悉く母に屬し、母の家に養はれ、母の家の爲に勞働する故に、かくの如く複雑なる大家内となりしのみ。狭き谷の底にて、娶らぬ男と嫁がぬ女と、相呼ばひ靜かに遊ぶ態は、極めてクラシクなりと言ふべきか。首を回らせば世相は悉く世絆なり。淋しいとか退屈とか不自由とか云ふ語は、平野人の定義皆誤れり。齒と腕と白きときは、來りて綯纏纏綿し、頭が白くなれば乃ち淡く別れ去ると云ふ風流千萬なる境



涯は、林の鳥と白川の男衆のみ之を獨占し、我等は到底其間の消息を解すること能はず。

里の家は皆草葺の切端なり。傾斜急にして前より見れば家の高さの八〇％は屋根なり。横より見れば四階にて、第三階にて蠶を養ふ。屋敷を節約し兼ねて風雪の害を避けん爲に、かゝる西洋風の建築となりしなるべし。戸口を入れば牛が居り、横に垂簾を掲げて上れば、爐ありて主人坐せり。

對岸の嶮しき山の樹間に、ちらくくと小屋見ゆ。炭焼かと思へば鑛脈を探る冒險者の宿舍なり、大阪より異人も折々來ると云ふ。

萩町をぎのまち 鳩谷にて夕方になる。柘榴の葉の色、花の色、胸の痛くなるほど美しかりき。

六月五日、風雨。

早天に飯島を立つ。高山の荷持を歸し、越中城端に返る荷持を雇ふ。五箇山を往來する荷持はボッカと云ふ。歩荷かちの音なるべし。木曾などにては持子と云ふなり。ベースボールの棒に撞木を取附けたるやうなる短き息杖を携ふ。庄川の左の岸を下り行く。姫子松多くなり、次で赤松も段々見え始む。赤松の林を隔てたる庄川の急流は全く唐畫の趣あり。上流には盛なりし藤躑躅、下流にては早悉く散りて、谷うつぎ花盛りなり。

道の側の叢に藁が鳴く。所謂谷ぐくなるものか。其聲時鳥河鹿などの類にて、節は谷水の音にまぎれず。

椿原邊より對岸は既に越中にて、處々に籠渡あり。國境の境川より五六町こなた、小白川といふ七八戸の村あり。村に寺あり。軒に釣鐘を釣りたる外、たゞの百姓家とかはらず。住持も經を讀まず。村のはづれに日本最小の小學



校あり。

赤尾の町と云ふ山村より、雨烈しくなる。尾瀬峠を越す、中腹に雪多く、一重の椿咲けり。

城端は機ノ聲の町なり。寺々は本堂の扉を開き、聽聞の男女傘を連れ、市に立ちて甘藷の苗賣る者多し。麻の暖簾京めきたり。

汽車にて加賀の金澤まで来て寝たり、今日の旅、草鞋十一里。

六月六日、晴。

疲れたれば寝轉びて物を書く。

夜は按摩の老人を引留めて、遅くまで白山の話をして聴く。

六月七日、雨。

此町に一人在りし友人、この四月に逝せたり。朝起きて枕上にこのことを

思ふ。

腹を損じたれば能登の和倉へ寝にゆく。

七尾に牛馬の共進會ありとて、多く若き駒を曳く。土地の人荒き馬をよろこび、麥酒などを飲ませる者あり。女子供の馬を怖るゝこと鬼の如し。

能登の茅屋は笹の葉を交せて葺けり。古き屋根には黄なる花の苔簇生せり。

能登島は平遠にして、麥畠の色青く黄に、織物を見るやうなり。能登一國も太古は島なりしか。國府の平野は一帶は海よりいくらかも高からず。

六月八日、雲多く日影淡し。

湯宿の奥の間に終日臥す。オスカア、ワイルドの『奥方の扇』とアーネストとを讀る。若き女枕元に來て頻に大聖寺の話をしたたり。

六月九日、大雨、風冷かなり。



朝船にて七尾の港に歸る。海岸はすべて赤土の崖なり。日本海は潮差少なければ、浸蝕の痕波の上に美しき線を作せり。

津幡にて乗換を待つ間、北海に渡る漁夫の群に交りたり。數百の荒くれ者の中に、老人女なども見ゆ。送りに來たる者十五六人、プラットホームに残る。髪の赭き女、眼を病める男の兒を負ひて立てり。泣くなら己ばかり父と一緒に行くぞと云へば、兒は母の赭き毛を引きて猶泣く。又や、清げなる女の、徒跣にて一抱へも有る藥罐を下げてあり。やがて汽車の中なる男にそれを渡して物を言ふ。鉢巻をしたる老人、元氣さうなことをいひて大きな唾を吐く。労働者の聲は皆すこし暖れたるやうに聞ゆ。

富山に着く頃雨やみたり。立山は此より見えざれど、四山は凡て雪を戴けり。

六月十日、晴れて涼し。

監獄に行きて見る。女囚は二十人ばかりありて絹を織る。禿げて頭に一本も毛なき老婆あり。女囚の顔は凡て神妙にて、何れも悪人とは見えず。後に聞けば出口より三番目のは、男を川へ突落して金を奪ひたりし女なり。

六月十一日、朝は曇る、今日入梅。

汽車にて新川郡に入る。名の如く大方は川床より成りたる平地なり。東に行く程づつ少しく傾斜あり。石川の川上遙かに山見ゆ。

滑川の濱より高志丸を見にゆく。若き練習生を乗せたる漁船なり。二三日の中に出帆してオコック海に鱈を釣りに行くなり。

魚津に着きて泊る。鯛の引網と蜃氣樓を見に日々數百の客あり。蜃氣樓は今日は見えず。詳しく話を聞くに、我がかねて夢想せしものは美しから



す。いづれギジョンなれば見ぬもよし。

六月十二日、晴。

此町にても亡友の家の前を過ぐ。格子の隙より夫人の後影見ゆ。

三日市を過ぎ、愛本の橋より右に折れ、黒部川の岸を上る。山を崩し石灰を焼く煙、狭き谷に満つ、村の名は内山と云ふ。此奥信濃の境まで村なし。

林道を開きて北城に出づ。路上温泉三所あり。

黒部川水濁りて白緑の色なり。川の中洲に處々廣き茱萸ぐみの林あり。此林の色と今日の水の色とよく似たり。

残雪は山の塵を被ぎて、近よる迄は見えず。奥に入れば林は黒けれど檜は見えず。名物の黒部杉、姫子松。ナラにて櫓を作り、女ども負ひて山を下る。

黒薙の温泉に入りて宿す。巖の下に薬師の堂あり。川音の間に、折々伏鉦

の音まじりて聞え來る。

六月十三日、晴。

今朝も猶川上に上る。出平の小屋に憩ひしに、よき猿の皮を敷きたり。猿の話聞く。夏は樹深ければ唯聲のみを聞けど、秋になればよく群を爲して往來するを見る。稀には孤猿あり。一旦群を離るれば友と食物を分つの煩累も無き故、自然に厭世になるなり。其代りには常に他の群より迫害せらるゝよし。

原の路を引返す、路上に樹を焚く少年あり。鍛冶の炭を製するなり。

愛本の橋本にてマキを食ふ、笹の葉に包める團子のことなり。

舟見は靜なる町、廣き道少しく坂になり、正面に雪の山高し。艾もぐさを作るとて門毎に蓬を乾す。



木曾より五箇山へ

泊の町に入り海邊に出でて見る。淋しき濱に舟二つ繋り、女ども灰石を荷ひ出せり。東はやがて越後の境に近く、赤土の山を切開き、松の間に電柱の列ねたるは、昔義仲が越え來りし宮崎の鼻にて、其名も悲しき親不知の荒磯へは、此道を行くなり。

歌と云ふうまやはいづこ宮崎のみさきのをちはたゞ青き海

(明治四十二年十一月、文章世界)

佐 渡 一 巡 記



### 佐渡一巡記

古い佐渡の旅行の忘れ残りを、今度入用があるので試みに書付けて見る。あれから此島ももう大分變つた様子だが、それをもう一度見に行つた後では、この記念すべき最初の印象が、消えてしまひさうなのが惜しいのである。

それにしても餘りに古くなり過ぎた。私が新潟から兩津の港へ渡つたのは、今から十二年前の六月の十六日であつた。ちようと梅雨のかゝりで、日本海の空は白く曇り、静かな大きいうねりがあつて、雨が少しづつ降つて居た。それでも船はさう揺れないでしつとりと氣分が落付き、よい季節に來たものだと思はずに居られなかつた。姫崎の鼻をかはらうとする時に、先づ眼に入



つたのは一帯の竹の山で、信越では見られない明るい風景であつた。島の東向きが殊に竹山によいといふことで、頂上に近い處まで伐開いて竹を植ゑ、それを盛んに北の縣へ供給して居る。四年から八年迄の間に一度づゝ伐るといふ。

兩尾の宇賀神山には今でも毎月二十四日に、龍燈が上るといふ話であつた。それを話してくれたのは甲斐といふ郡會議員の政友會員で、支部の大會に出席した歸りと言つた。それが音羽の池の故事などを詳しく知つて居るだけで無く、包みから數多くの歌の短冊の、近頃書いて貰つて來たのを出して見せたりした。佐渡にはあの頃まではまだ斯ういふ人が居たのである。

夷は見た所まことに簡明な湊であつた。所謂兩津を繋ぐ湖水尻の石橋の袂に、税關の見張所も有れば大きな松もあり、たしか其樹の下に一つの平石が

置かれてあつて、昨日の祭禮の御旅所にもなつて居た。この町の祭は新曆六月の十五十六日で、ちやうど偶然に私は來合せたのであつた。宿をきめると早速見物に取りかゝる。馬に騎つた鼻高童子の人形を、車に載せて曳いて行く。信州と同様に舟の形をした飾りものもあつて、それにも亦下に小さな車が附いて居る。

同じ行列の鬼太鼓といふものも見た。髪は能の猩々のやうに長く垂れ、面は仲々の上作と思はれた。撥の持ち方に特色がある。一方の手に二本とも持つことが折々あつて、其ポーズがよほど蘭陵王の舞の繪に似て居た。それから夜に入つて、笛の音をたよりに尋ねて行くと、吾妻樓といふ貸座敷の奥の間で御神樂がある。それを格子の外から町の人と共に覗いて見る。舞つて居る神子は神主殿の細君のよし。その笛の音も能のものによく似て居る。舞の



後で法螺貝を吹いたのは全く珍らしい。此土地には山臥から神主になつた者が一人有る。多分は其神主でしよう、是はその晩の按摩の説である。

翌日も他に用が無いから、何べんも町をあるいて見た。湊の町の海の側の家は、家作りが皆よく似て居る。大抵は二階屋で何れも表間口が狭いのに、一間幅の土間を街道から濱まで突進して居る。土間には軒竝から一間ばかり引込めて入口の戸を付け、其横手からも店の間へ上れるやうにしてある。奥行は途方も無く長く、濱へ段々下りに續いて居ると見えて、暗い家の中を覗いて見ると、土間の行止りに青い海がちらりと、どの家からも見える様になつて居る。海に面する一區劃は物置に使つて居るらしいが、元は冬分の舟倉であつたらうかと思ふ。現に夷の方では今も此部分に舟を引入れてある家を多く見た。是が海の水面のやゝ淋しく見える原因のやうであつた。能登の東

濱の村々にも、斯うして住宅と舟置場の繋がつて居る建物は幾らもある。

三十七八年前に加賀の俱利加羅附近から、移住して來たといふ老人と、路をあるきながら話をして見た。今は水津すみづに住んで農と土方とを兼業にして居るといふ。金山かなやまにはたゞ一年餘りしか居なかつたといふ。島へ來て氣が付くのは、旅商人の少ないことであつた。今日は祭の休み日だといふのに、香具師ほし店の類が、一向にそこらを立廻らない。是はわざ／＼渡つて來る者が少なく、土地にはまださういふ事をする者が多く無いからであらう。

濱へ出て見ると小舟が一艘鷺崎へ歸つて行かうとして居る。ふいと便船をして行つて見る氣になつて、慌てゝ支度をして大きな荷物を持込んだのが、後で非常に厄介なものになつてしまつた。舟には五六人の老若男女が乗つて居た。何れも親類うちらしく仲よく物を食べ、又色々の話をして聽かせてく



れたが、もうすつかり忘れてしまった。舟は古風に地方ちかたに沿うて走つた。あの頃はまだ珍らしい小形の發動船である。丘陵が海に迫つて草花が多く、里の森は色が美しくて民家はそれに隠れて澤山有るやうには見えない。松島辨天岩などいふあたりは殊に百合の花が目についた。それから少し手前の北きた小浦こいらのあたりが、陸もひどい難處で冬分は全く交通が絶えるといふことであつた。鷺崎は至つて静かな澗まであつた。水草が茂り其水に夕日がさし込んで居る。何艘かの帆前船が岸からすつと離れて碇泊して居る。新潟から炭を積み遣つて來た船だといふ。宿は木村といふ舊家で物持、舟で親切にしてくれた人たちも皆この一家の者らしかつた。

あくれば六月の十八日、外海府そとかいふ一見の旅途に上つた。南濱の赤玉村から來た島道者五人、濱尾源一・市橋富士太郎・菊池幸藏・山本紋十郎・白杵音藏、進ん

で荷物を引受けてくれ、又忽ちに別懇の間柄になつた。此中では濱尾君少しく文字あり、菊池市橋の二君が稍年長であつた。互ひに苗子を呼び合つて居るのが面白い。赤玉は今岩首村の一大字で、古來赤玉を産する故に此名がある。古いものは瑪瑙のやうな品がある。今も其石の屑を萬年青の鉢などに入れる爲に、一升何程といふ値で賣るさうである。越後と向き合つた農主漁徒りつの村で、水津から近く五十戸ほどの家數であるといふ。一度是非行く筈になつて居て、まだ約束を果すことが出來ない。

今日は佳い色をして居るが、外海府も此邊の海は實に荒いのださうである。それ故に屢々海難の慘話がある。矢崎の岡を越えると濱は其北を向いて居て、そこには白塗りの小舟が一つと、潜水服の乾してあるのが目に著いた。是だけが新らしい文明色であるといふことは、寧ろ荒濱の淋しさを加へるやう



にも感じられた。

佐渡にはホイトといふ者が土著して居る。兩津の南端の住吉社の傍に十數戸、其他にも相川にもとは二十戸、河原田に十何戸、小倉にも赤泊の柳澤邊にも若干居た。ホイトの四十八職といふ諺も傳はつて居る。現在は鑄物師いもじ即ち鑄懸屋、蝙蝠傘の直し、屑物買ひなどをするが、その鑄物師も古くからの商賣のうちでは無かつた。又正月の春駒にも出たといふことである。

昔はつゞれを着て一見して普通の農民と見分けることが出来るやうになつて居たが、今は却つてホイトの方が好いなりをして居るといふ。此日我々がはぢきまき彈崎の燈臺の入口で、すれちがつた四人づれなどは、その三人までが襟に會社の名を染抜いた絆纏を着て、職工のやうな風采をして居たが、それを赤玉の人たちは一見して、すぐに氣が付いてホイトだと囁いた。しかもこんちは

など、聲を掛けて別れて、さまで輕しめる様な風は見えなかつたのである。

どうしてホイトだといふことが判るのかと訊いて見ると、是には明瞭に答へることが出来なかつた。しかし少なくとも一つの特徴は淺葱色あさぎの風呂敷を筒に縫つて、その中程を綴ちて袋にしたのを、携へて居るから知れると言つた。即ち芝居に出て来る武者修行の旅人などが、肩から斜めに負うて居るものと同じいのを、佐渡のホイトは今でもまだ使用して居るのである。其名を何といふかは誰に聞いても知れなかつた。關東東海では一種の漂泊者、我々がサンカと呼び又箕直みなほしなど、謂ふ人々が、スマブクロといふものを持つて居ることはよく聞く話である。是は形が三角なものだなどといふ人があつて、私はまだ氣をとめて見たことが無いが、それも或は同系統の製式では無かつたかと思ふ。



兩津の南はづれの住吉社の脇に住む者は、普通スミヨシで知られて居るがやはり亦ホイトであつた。此中には物持があつて、たしか名を半兵衛といつて金を貸した。スミヨシの金を借ると縁喜がよいと謂つて、今でもまだ借る人があるといふのは縁喜の爲かどうか。但しこの話は後で聞いたのだから間違つて居るかも知れない。

それよりも強く記憶に印せられて居るのは、この晴れたる午前の外海府の風光であつた。彈崎の燈臺を出てから、眞更川まさらがはの村に取付くまでの間、海端うみはたに平地があつて大きな阪も無く、磯や砂濱の美しい變化は、一步毎に濃かになつて行くやうに思はれた。それで居て路傍に人家といふものが殆ど無い。出逢ふのはたゞ牛ばかりであつた。ちやうど野草の最も花の多い季節で、天然の秩序とも名付くべきものが、まだ此あたりではよく保たれて居るやうな

氣がした。たとへば大野龜の鼻につゞいた一つの小山では、麓から頂上まで萱草くわんそうの花一色で、飾り立てたやうな景色を見た。そこへ行くまでも濱には蕘あやの如き草の一面に、紅い花を咲いて居る處が方々に有り、見馴れて居るただの草花でも、大抵は二町三町の廣い面積を、他の草を交へずに連なり咲いて居るのが奇觀であつた。さうして花の色が一樣に極めて鮮明であり、中には又香の高い白い花などもあつたが、名を問ふことが出来ぬので本當にたより無かつた。玫瑰ばななすの花はまだ少し早いやうで、稀にしか見られなかつた。蔓はま荊はらは既に路の傍にも咲いて居た。

願ねがひの塞さいの河原は島巡禮の人たちが、殊に心を留めて拜んで行く靈場であつた。以前は西北を口にした深い岩窟であつたかと思はれるが、いつの世かの風浪にその後の山が崩れて、今は行抜けになつて、わざ／＼其中を通るやう



に路が出来て居る。前には地藏堂を建て、大小無数の石佛が、穴の内外に起臥して居る。石を積む風習はこゝにも盛んに行はれて居るらしいが、それは皆旅する者の道心からであつて、あたりは弘い間一軒も人家が無い。是が中古の葬地の跡であつたらしいことは、其後他の地方の例を比べて追々に判つて來たのだが、島の人たちにはまださうは考へられず、半ばあの世のやうな信仰を以て眺められて居るのである。

鶺鴒うのしまは最初にかゝつたなつかしい人里であつた。是から又一つの岡を越えて、漸く眞更川の村には入つて行くのである。佐渡の名物の「のぼり木戸」といふものが、此邊では幾つか見られる。牛の牧場と畠場とを區劃する爲に、高い石垣を設けて旅人がそれを越えるやうになつて居る。眞更川は光明佛寺に登つて行く山の口である爲に、是も島めぐりをする人にはよく知られ、

村は高地に在つて構造がやゝ他と異なつて居る。私たちが晝休みを頼んだ一軒の農家などは、床が高く入口に広い土間があつて、建て方が津輕などゝ似て居たが、他の家々はどうであつたか比べて見なかつた。靜かにして居ると村の人の色々の物言ひが聞えて居る。後鄰の家の老女がオチャーと聲高く呼んだ時に、返事をしたのは若い娘であつた。足利期の記録によく出て居る阿茶の局、もしくは茶々といふ男女の童名なども、本來は稚兒が人を喚ぶ聲から出たもので、さては國々で父をチャンと謂ひ、母をチャチャなどといふのも起原は一つであらうといふことが、此時に始めて心付かれたのである。

外海府の村々は少なくとも現在の状態では漁村で無い。村に田の多いことは却つて上かみの方に越えて居る。海から望んだならばよくわかることと思ふが、この邊は海沿ひの臺地がよく發達し、それが磯に向つて絶壁をなして居る。



たゞ其一部だけが洶<sup>つ</sup>られて僅かな濱を作り、或は山水<sup>やまみづ</sup>を誘うて深い澤を刻み、そこに登り降りの苦しい阪が出来たのである。村はこの僅かな浦の低地に固まつて居る故に、外形は一個の漁村のやうにも見えるが、後の岡の上に登ればこの弘い田地があるので、それも排水がよい爲に良質の米を産し、今では島で重要な米どころに算へられて居るのである。

この海岸の臺地はすつと南に續いて、金を産する相川の後の山までが、同じ高さである様に私には思はれた。勿論南へ行くほど濱沿ひの低地部は多くなり、山が深くなるほどづゝ川の水は豊かになつて、所謂デンヂは其兩岸に拓かれて居るのだが、尙何度と無く海に迫つた磯山を越えて、次の村へ下つて行かねばならぬことは、伊豆の西濱や天草下島も同じであつた。眞更川を出てから笠取峠といふのが、新道でも可なり険しい山路であつた。光明佛の

山から出る一つの山川を、やゝ上流に溯つて渡ることになつて居るので、急に山の中のやうな気分になる。石楠<sup>しゃくなん</sup>の花なども咲いて居ると見えて、折取つたばかりの一枝が路上に棄てゝあつた。それから濱傳ひに岩谷口の村まで出て來ると、爰はもう農村であつて家のまはりに田が有る。

赤玉の五人は重い私の荷物を持ちながら、始終面白い話ばかりしてあるいて居る。是は菊池君の話の後から私が聴取つたのだが、佐渡では佛堂の守りをする道心者をロウソウと謂ふらしい。これは老僧では無くて濫僧と書いた古語であらうと思ふ。むかし或家の門に立つて、ロウソウが物を乞うた。斯ういふ人の中には時々偉い人が姿をかへて御出でることがある。粗末にしてはならぬといふと、忽ちいゝ氣になつて「大師あらはれたり」と謂つた。傍の一人が何をこいつが言ふぞ、貴様は何村とかのロウソウちや無いかと叱りつ



けると、ぬからぬ顔をして「又大師あらはれたり」と謂つたといふ話。是は弘法大師の石芋や喰はず梨、又は杖立清水の傳説の分布、今でも旅僧がやつれたる姿をして、村々を巡つて人の心を試みて居るといふ信仰の、久しい歴史を考へて見ようとする者ならば、耳を傾けずには居られない奇聞であつた。元は江戸あたりの小咄から出たのかも知れぬが、それを離れ島の浦人が學び知り、又その可笑味を解して居るといふのは、何か隠れたる力があつたことと思ふ。佐渡は斯ういふ類のにせ者のどこよりも多く寄つて來る土地である爲に、自然に其間にせり合ひが起つたのでは無いかとも考へて見た。

けふは舊曆の五月の節供であつた。遠近の家で餅をつく音がする。その音がトントンといふ三つ拍子で、我々の横杵に比べると著しく間が細かい。或はまだ手杵を用ゐて居るのでは無いかと思つて、氣を付けて居たが覗いて見

ることが出来なかつた。此あたりには榎かたはの樹が多く、何れも日にかゞやいて伸びくと茂つて居る。その榎の葉の色と餅臼の音とだけで、私の五月節供はすませてしまはなければならなかつた。

關村矢柄村。若木氏の集めた佐渡の民謡で、前から聽いて居た地名である。「生れ在處さいしよならなつかしや」といふ歌なども思ひ出した。關には膳棚と稱して磯端に珍らしい平岩が連なつて居る。山からは木の葉石も出るといふことだが、少しも休まずに通り返してしまつた。佐渡には近頃まで村での出來事を、歌にうたつて盆踊に踊る風習があつたので、斯うした一人の初旅でも思ひ出すことが多い。

達者の傳次が焼けた

海豚殺したその罰で



といふ一章などは、今でも海豚を見又は其話を聞きたびに、一度でも聯想を馳せなかつたことが無い。海豚が寺詣りに來るといふ話は此島にもあつた。もつと詳しく尋ねて見たいと思つて居る。達者といふのは姫津の南に在る入江であつたが、もう此邊にはさういふ話も無ささうである。

石名の檀持山清水寺の、名木の二本の鴨脚いんげんは見ごとなものであつた。此邊の家作りを見て行くと、板葺きも草屋も大小によらず、多くは三つ割式で中央の一間には、表口が一杯に開いて爐が有るらしく、一方は出居でまの間他の一方は勝手で、奥の寢所はまだ押入れ同然の附屬物であるやうに見えた。日向の椎葉山村しひはさんそんで見て來たものと、構造の似て居るのがよく目に著いた。多分は主屋おもやと左右の客舎と竈屋かまやと、三つが別棟であつたものを一つ棟木の下に、寄せ合せた名残であらう。外見がやゝ低く見える爲か、二階を作り添へること

が此頃は流行して居る。

小田の某氏は此邊きつての物持で、屋敷も高く家つきも立派に見えたが、是はたつた三代で作り上げた身上で、無理なことをして溜めた金ださうなと同行者は謂つて居た。大倉の平三は此邊での舊家で、梶原平三の護持佛といふのを村に祀り、家には又古い武具類を持傳へて居る。大きな門が田の真中にあつて墻は無く、其田と家との間を旅人が通り抜けるやうになつて居る。家の障子はすべて清書の紙で貼つてある。質素なものである。しかも鷺崎の木村さんもこの縁續きだといふことまで、始めて來る道者たちがもうちやんと知つて居るのである。

入川いしかわの村に一泊する。此村の舊家の服部氏、つい數月前から宿屋を始めたといつて、家の作りは全く昔のまゝで、食物だけが當世の旅館ぶりであつた。



こゝへ泊つて行くのだと意氣込んで入つて行つた一人が、何か挨拶が出来なかつたとかできア事をした。是では入れなくなつたと言つて自分だけを殘して、他の小家に行つて宿をとつてしまつた。しかも翌日の朝は作り聲をして、別の人になつて私を誘ひに来てくれたのは、どこ迄も親切な島の人の心持であつた。

入川村の氏神は寶生神社、祭神は木花開耶媛命であるが、祭禮の日には他の村でも同様な相撲がある。近いうちにもどこかの郷社の祭があるさうで、其村角力の廣告がそちこちの辻に掲げられて居る。村には代々の關取の通り名があつて、其名を有望な青年に相續させて居る。之を代表者として村どうしの勝負を競ふことは、此節の選手制度も同じことで、どこへ行つても人が相撲の話ばかりして居る。奥州會津の新宮權現の相撲は、たしか新葉記にも

見えて居た例であつた。是も村々の關の名が定まつて居て、昨年ほての最手を能力と呼んで居た。江戸でも國々の力士が各々同郷の支援者を有し、片屋は有つても其最員が個人的のものであつたのは、原因が是から出て居るかと思ふ。だから村々の花相撲が衰へてしまふと、第一によい力士を見つけることがむつかしくなつて來るのかとも思はれる。

片邊川の川口では、網を張つて鱒を捕つて居た。此川上は二里位までは捕れるので、山の中に小屋を掛けて漁をする者が今でもあるといふ。

姫津は町の瓦屋根を、高い處から見て通り過ぎてしまつた。昔は相川專屬の湊であつて、下關大阪との交通が繁く、越後とは殆ど取引をして居なかつた。汽船が始まつてから海路は全く變つたが、それでも大きな漁業権があつて農を頼りにせずとも榮えて行くことが出來たのであつた。今ではさうばか



りも謂つて居られぬ様子である。以前は相川の南のドロとかいふ處に住んで居て、純然たる海の移住者であつたらしいが、陸地に馴れると生活が少しづつ變つて来る。相川の海士町あままちなどもそれより新しい土著者であるが、埋立が出来てから海に遠くなり、もはやかつぎなどをする者は居らぬさうだ。内外の海府が追々に農村となつたのも、恐らくは又同じ過程を経て来たものであらう。

相川銀山の繁昌は慶長に始まり、正保頃が絶頂であつたらうかと言はれて居る。正保から元祿までの間に此町の寺の潰れたものが、其跡の分明なものだけでも四十五箇寺あるなど、舊記にはあるから、たしかに其頃の方が人間は多かつたのである。しかもその一旦の殷富を維持して居た支柱が、折を見ては一本づゝ抜けて行つたのみで、都會といふものはさう急速に衰へて行く

ものでも無かつた。寧ろ前から在るものを何とかして保存しようとする點に、榮える町では見られない一種の物なつかしさが感じられる。相川の後の一帯の岡では、樹々の緑が海の光に映じ、鶯が終日啼いて居て、底は此世の地獄とまで歌はれた何百年來の人事の葛藤が、籠められて居るものとはどうしても思へなかつた。旅館高田屋の横町から山手に登つて行く小路は、多分金山かなやまに働く人たちの出入口であらう。宵から朝方まで始終二三人づゝの足音と話聲が、ぼそ／＼と枕元へ聽えて来る。それが夢うつゝの堺で、何か此土地の長い昔語りを、聽いてでも居るやうな氣がしたのであつた。

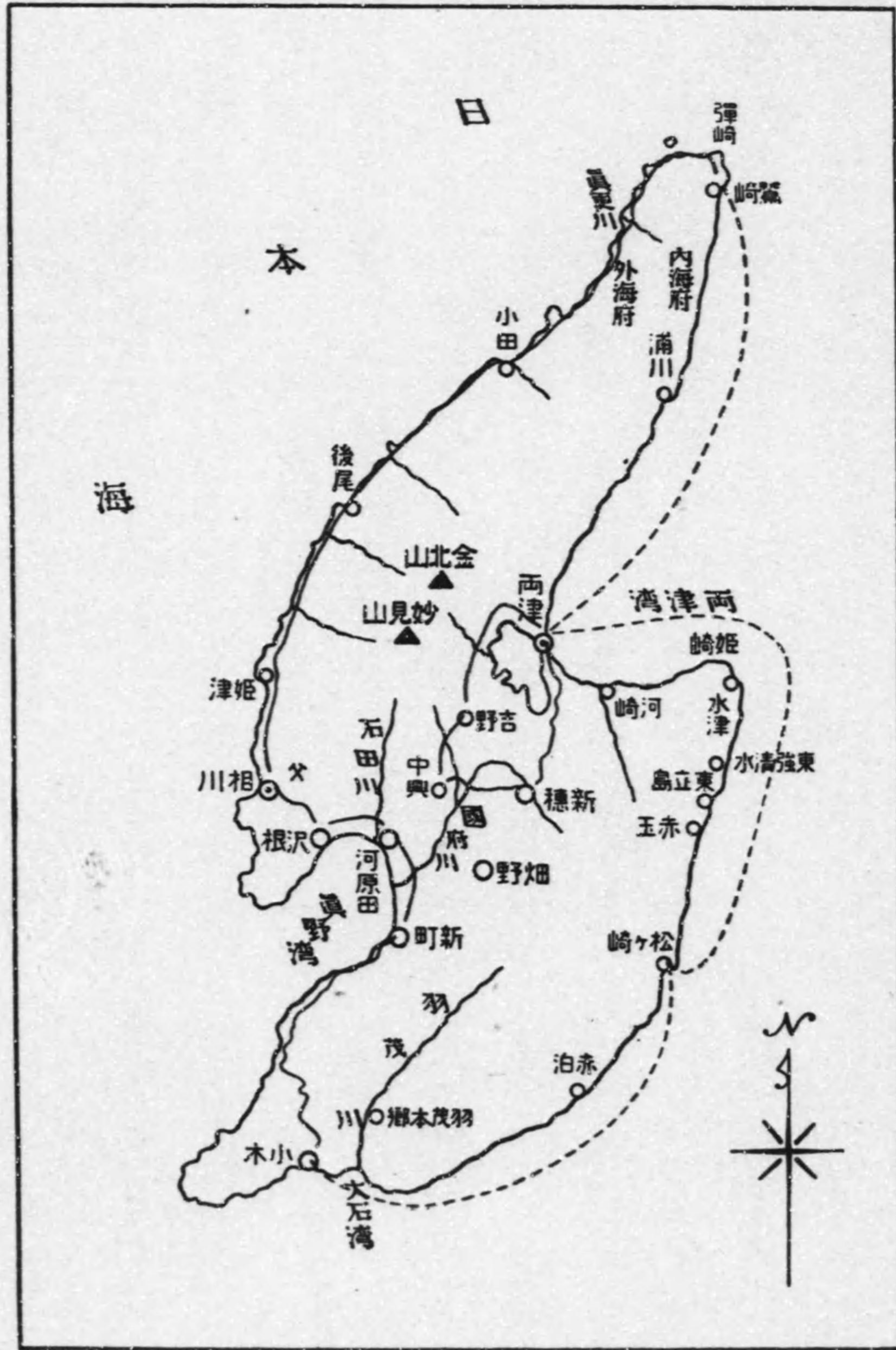
こゝから私は又一人になつて、車を雇うて澤根・河原田・新町などを走り過ぎた。此邊の見聞は後に多くの紀行類を讀んだ爲に、印象がこつたになつてどれ迄が自分のものだか分らなくなつた。格別又附加へて見ようと思ふこと



も無い。それから田切須・西三川・高崎・小比叡、海と村里との變化の多い風景だけは目に残つて居る。小木に入つて新築したばかりの喜八屋といふに泊つた。建て直してもやつぱり昔風に、まん中の廣間を打通して、二階の客室を周圍だけに設けてあるのが嬉しかった。是は大きな家族の寢所から發達したものらしく、其後も奥羽の旅行では折々之を見たが、圖でも添へないとそれを詳しく説くことは出来ない。宿屋が亭主の名を屋號のやうに使つて居るのは珍らしいが、是も伊香保や瀬見の温泉、伊勢の御師などにも似た例はある。東北ではそれが一轉して、今では苗字と通稱との半分づゝを連ねたものが行はれて居る。

六月二十一日の朝早く小木を立て、發動船で松ヶ崎へ渡つた。そこで小さな和船に二人の船頭を雇つて、磯まはりを夷まで漕がせたが、潮が悪いの

佐渡一巡記 大正九年六月





で舟が少しも進まず退屈してしまつた。色々話をしてくれたやうであつたが、今はもう殆ど覚えて居らぬ。

地圖を見て居て氣が付いたことだが、佐渡には同じ村の名の二つあるものが多い。それを大抵は方角などで區別して居る。松ヶ崎の東の東強清水ひがしこほろみづもその一例で、此地は久知村の八幡様が、始めて御上陸なされた故迹と傳へ、御造營の場合は申すに及ばず、毎年の祭にも爰から出て行つて、參列するのが嘉例になつて居た。何でもさういふ名の靈泉があるらしく、強清水といふのも何か神祭りと關係のある言葉かと思はれた。久知の長安寺といふのは昔から有名な寺で、珍しい言ひ傳へが數々あるといふ。

赤玉の村の沖を通る頃には、もう長い日も黄昏に近くなつて居た。よつほど爰から上つて水津にでも泊らうかと思つたが、やはり荷物が有る爲に決心



がつきかね、其まゝ舟の中に寝轉んで夜の海を渡り、月も隠れてしまつてから漸く兩津の港に戻つて來た。

その翌日は國中くになかの見物に出かけた。中興なかむねの川邊氏は兄の知人であるので、訪ねて行つて土地の話聞いた。此邊で最も古いといふ民家を、見せてやうと言つて案内せられる。三間一尺梁はちといふ言葉があるといふが、私には其意味が呑込めなかつた。現在はおほむね四間になつたといふのは、椽側の附いたことをいふのだと言つた。オエ即ち板敷になつた部分は、私の想像の通り二つに區劃せられ、土間を加へて三つ割になつて居るのである。その中央の間の突當りは寢部屋であつた。親隠しといふ名は知らなかつたが、耻隠しの語はまだ記憶する人がある。寢所に藁を使ふからさういふので、揚げ敷居と稱して敷居を何寸か高くするのも、其寢藁が外へこぼれ出す見苦しさを防

ぐ爲かと思はれた。寢部屋の入口が此家では板戸半間で、他の半間は浅い物置きになつて居た。

風呂桶に藁で編んだ天蓋てんがいの様な蓋のあるのも、私には全く新らしい見學であつた。桶は平日は土間の隅などに轉がして置き、湯をわかす時ばかり上り段の端まで運んで來る。藁の天蓋はちようど其上に繩でつるしてあるので、之を覆うて湯氣を籠らしめ、其中にしやがんで蒸されるのである。湯の量は僅かで最も熱く、それを時々釜から汲出してさし加へる。足を焼かぬ爲に底に踏臺がある。子供がいゝ心持に中で居睡りをして居るのを知らずに、熱湯をさして火傷をさせたといふ話もある。後にこの附近を旅行した人の話をきくと、新穂では宿屋でも此式の風呂を見た。但し蓋だけは木製の箱であつて、たとへば長火鉢じやたんの助炭じよたんの如く、一面を引戸にしてあつたといふから、中世の



蒸風呂の簡略なものであつたことがわかる。京都でも戸棚と風呂とを間ちがへた昔話がある。北國では今でも戸棚をばフロと謂つて居る。

國中にはカノエ塚といふ石塔や塚が多く、今でも折々は新たに之を立てることがある。庚申とは関係が無いと見えて、毎月朔日とかに祭をするといふ者があつた。又石塔の表に大きな梵字を刻したものが念佛塔であることは、關東の板碑時代も異なる所は無い。日蓮親鸞の遺跡ばかり多い處かと思ふと、古い眞言念佛の名残もまだ全く消えてしまつては居ない。

此地に茅原鐵藏老といふ古い「郷土研究」の寄書家があつて、大悦びで尋ねて来てくれた。むつかしい原稿を書く人で、いつも編輯者を難澁させ、それを意を掬んで書き直すと、折々違つて居たといふ小言がある。よつほどわからぬ人だらうと思つて居ると、逢つて見れば大ちがひで、七十幾つだといふ

のに壯年の如く、はき／＼と物を言ふ人であつた。相手の抱いて居る随分込入つた不審を、簡単な問ひの言葉の裏に覺つて、そつちの無い返答をするだけの明敏さを持つて居る。斯ういふ前世紀教育の完成した人から、文書の採集ばかりを續けて居たのは損失であつた。もう少し此方から出て行つて、口で教へて貰はねばならなかつたのである。しかも私たちの旅で逢ふ人といへば、普通は手紙でも用の足りるやうな人ばかりで、従うて無用な辭令を交換して、別れてしまふやうな場合が多い。遭遇は決して容易では無いと思つた。

佐渡へ來た以上は誰でも見物に行かぬ者は無いといふ場處を、十箇處ほど教へてもらつて、私は皆残して來た。誰かゞ觀察して置いてくれられるならば、私などは其教を受けた方がよい。それも一人だけならうそを教へられるかも知らぬが、多勢の記録があれば比べて見て樂に眞實がわかるだらう。誰



もが省みなかつた處にこそ、我々の知りたい事實は遺つて居る。旅の學問には人の顔、何でも無い物ごし物いひなどが、本に書いて無いから自分で行つて経験しなければならぬ。相川や夷などで在ざいから出て來る物賣りは、通りに荷を卸して立つて居る様子が、何だか少し變つて居ると思つて見ると、多くは人家には背を向けて、町を通る人に賣つて居るのだ。買ふ者も半分は近所の住民で無く、わざ／＼買物に出たのかどうかは知らぬが、他處から來た人が多く見受けられた。立賣り町立ちといふ語は奥羽の方にもあるから、あちらの人には珍らしくも無いであらうが、少なくとも關東から西にはもう滅多に此光景は見られない。それほど町といふものが、もう文字通りの市になつて居るのである。

再び海上が至極穩かで、次の日の午後には又新潟に戻つて來て居た。早速

縣の圖書館に出かけて、山中樵氏に頼んで佐渡の書物を見せてもらった。相川縣史二十一冊、その第二卷の禁令編には、明治九年二月の相川縣權令達、「自今可改箇條」といふものが出て居る。紙數は二十枚餘、四十四五年後の現在と比べて、風俗の推移を見るに便が多い。其中には寢部屋の風、若い衆仲間の慣習、又は結願とか功德とか謂つて、石塔をむやみに立てる弊害などが説いてあり、又一方には其頃の二見港の、繁華の有様などがよく窺はれる。寫して置いてもよささうな本であつた。

それから古いものでは佐渡年代記十卷、慶長六年以後嘉永三年までの歴史、主として相川の事蹟を録して居るが、中には又西三川の金山や田切須の町の事も見えて居る。最も心を動かしたのは承應元年三月の小比叡騒動、辻藤左衛門が同僚の姦曲を見るに忍びず、之を彈劾しようとして却つて惡黨の爲に



害に遭うた悲劇であつた。密書を携へて江戸に上つた使者が、海上難船してその屍骸が島に漂着し、書状は奸人の手に落ちて事露はれたといふ段などは、事實ではあらうが劇以上の効果である。それから父子主従合せて二十人、蓮華峯寺に楯籠つて焼討せられ、この結構の美を極めた伽藍が、一朝にして灰燼に委した話は、今讀んで見ても胸が躍るやうであつた。

佐渡志の卷五にはヤシホ即ち椰子の實の記事があつた。此物島の産に非ず、もろこし嶺南の國々より出るもの、漂ひ流れ來るを、海濱の民拾ひ得るなりとあつた。その海濱といふのは外海府でもあつたらうが、曾て之を手を取つて珍重したのは何人であつたらうか。又其物は今はどうなつてしまつたか。我々の生活の可なり印象深い經驗にも、尙斯うして痕跡を留めぬものが多いのである。

(昭和七年十月、旅と傳説)

## 佐渡の海府



## 佐渡の海府

地圖で見た佐渡の島は、牽牛花の二葉の形をして居る。その二葉には僅か大小が有つて、外側の大佐渡の方が、峯も高く海岸線も幾分か長いやうである。越後の海府と對立する佐渡の海府は、昔はこの大佐渡の海岸の、略全部を包括したものかと思ふが、現在の内外海府二箇村の地域は、西北鷺崎の海角を中にして、十二三里の間に限られて居る。大字が十四で四百餘戸三千人ばかり、此に巡査が一人居る。冬分は折々杜絶するやうな交通状態である爲



に世間からは今尙別天地の如く取扱はれて居る。自分は地名から推定し得る海部土著の北の限線として、越佐二國の海府の村々に、若干の生活上の特色を豫期して居たのであるが、今の處ではそれが空想であつたやうな感じがする。しかも歴史に見残された静かな外海岸の村組織には、兎に角に研究者を失望せしめぬだけの過去が潜むやうである。後の爲に小さな記録を作つて置かうと思ふ。

佐渡の文獻は必しも貧弱では無いが、惜しい哉何れも二百年以降の集成で、而も其大部分が國中くになかの一盆地と相川とに限られて居る。相川當年の殷富は、爰に昌平文學の實生みはえを成木せしむるに十分であつたが、根が江戸の統一思想から出て居るだけに、所謂郷土の英雄に對する敬意が足りなかつた。其結果は今日に至る迄、此島の歴史は殆ど流人の歴史である。中世の地頭が眼近く

流人を監視したやうに、相川の風雅の士も、名所舊跡を一眸の下に纏めんとした姿がある。由緒を語るべき本間澁谷蓋原等の一類は多くは他郷に去つた。聞書覺書などの頓と傳はらぬ國である。小佐渡の方には其でもまだ、若干の殺伐なる記録が有るが、海府に至つては史學者との交渉が殆ど無い。史料を文字以外に求めない限りは、恐くは永く斯うであらう。手短かに申せば此方面には、鬭諍と大きな訴訟とが曾て無かつた。それをするやうな元氣な階級が来て住まなかつた。其故に欽明紀の肅慎の隈の後、特筆大書するに足る事件が何も無かつた。即ち話にならなかつたのである。

## 二

此様な事件は實は無い方が結構だが、一つ困ることには海府の名を遺した



漁人の部曲が、其後去つたか將た留まつて變じたかを、明瞭に決定することが容易で無い。併し兎も角も戰國の終の頃には、此等の村々は既に只の農村に爲つて居たらしい。越後の上杉景勝が一島を平定した時には、内海府即ち東南面の十數村は、吉住の本間氏と梅津の澁谷氏とで分ち領し、羽黒の澁谷氏は嶺を越えて、外海府の鶴島眞更川などを支配し、其他の諸村は石花の石花將監之を領して居た。石花氏は府中の本間殿の旗下であつた。蝸牛角上の争を事とした永い年月、外海府の山田の米も、やはり其兵糧の用に供せられたのである。平野地方の旅人の眼には、不自然にも思はれる肥料の運び方、即ち一桶づゝ汚い物を背に負うて山阪を登る風も、随分古くから必要になつて居たらしいのである。此點に於ては海に擴つた島曲の里でありながら、却つて越前西の谷などの山村と似た事をして居る。

海府は農村となるべき内外の事情を具へて居た。地貌の上から言へば、あるいて見ればすぐ分ることだが、佐渡島の周圍には一帯に海岸臺地が發達して居り、其が外海府に於て殊に著しい。高さは二百尺ほどもあらうか。つまりは國中即ち北南二嶺の中間に横はる平地の、夷港に接した最高部と、略同じ位の高さであつて、其原因が若し自分の想像の如く、島の土地の一般の隆起に在るものとすれば、其年代は大佐渡と小佐渡との、陸續きに爲つた時と同じ頃と謂ひ得る。特色ある海府の風景は、半分は是が素因を爲して居る。長汀曲浦の旅の目を怡ばしむべく、到る處に其高さの瀑布が有る。又我々が名けて「鳥の極樂」と謂ふ絶壁が多い。鳥の極樂は或は曾て人間の地獄であつた。岡が崩れて眞直な岩を露し、久しい間に樹木が成長し花咲き、鳥をして快活に歌ひ且つ戀せしめて居る。斯ういふ崖の下を旅人は行くのである。瀧